

---

# 人魚姫

霜月黎夜

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

人魚姫

### 【Nコード】

N0717A

### 【作者名】

霜月黎夜

### 【あらすじ】

遙か昔、人間は人魚と共存していた。しかし、人間は自らの愚かさから、共存の道を絶った。残ったのは、美しい物語だけ。なのに今、永い時を経て、人魚が再び現れた。

## 噂

とある場所に、“人魚浜”という小さな浜辺がありました。

そこには、たびたび人魚が訪れ、人間とお喋りをしたり、唄を歌ったりしていました。

人魚は皆美しく、恋をして命を落とす男女も少なくありませんでした。

それでも、人間は人魚を憎んだりはしませんでした。仲良く、平和な時を過ごしていました。

しかし、戦争の下に、人間の心は枯れていきました。

あちこちで戦火は絶えず、街も森も何もかもが燃えて無くなりました。

人間の心は、卑しくなりました。

人間は人魚を捕まえ、高値で取引をしたり、見世物にしたり、やりたい放題の悪行を重ねました。

人魚は嘆き、海の底へ姿を隠してしまいました。

それから今日まで、誰も人魚を見た者はいません。

風も陽気な午後、瑞樹小瑪みずきわためは喫茶店のテラスで、紅茶を啜っていた。誰かを待っているというわけでもなく、たった独りで静かな時間を過ごしている。

この小瑪という若者、見た目は息も凍えるような美貌をしているが、男である。一見しただけでは、男とは判らない。ひとつに結わえられた長く艶やかな黒髪、病的なほど青白い肌、紅をはいたような薄い唇、伶俐な双眸…どれも女より勝り、冷ややかであった。

恐ろしく整った容姿を持つ以外、特に変わった様子のない普通の若者であるが、街の人たちからは変わり者として見られている。現

に、こうして独りで座っていても、声をかける者はいない。だから、ぼうつと目を開き、人々の声に耳を傾けていた。すると、面白そうな声が聞こえてきた。街の男衆である。「なあ、人魚が見つかったって、知ってるか?」「ああ、知ってる。結構、街の外まで広まっているらしい」「しかも、見つけたのはあの欲深い男爵だとよ」「海へ遊びに出っていたら、たまたま人魚がいたんだとな。唄を歌っていたと聞いたぞ」

「美しい人魚で、見世物にして儲けているそうだ」

「街の外からも来ているんだろう? 人魚を見に…」

「俺も行ってみようか…」

「やめとけ、やめとけ。どうせぼったくられるに決まっている」

「ああ、絶対そうだ」

「本物かどうか気にならないか?」

「俺は、人魚よりも明日の飯が気になる。さあ、仕事だ仕事」

「へーい」

ガタガタと、椅子の足が乱暴に鳴き出す。

小瑠が視線を右へ動かすと、三人の大柄な男たちが談笑しながら去っていく姿が見えた。

「…人魚か」

小瑠は興味深そうに洩らしたが、そこから動こうとはしない。

「どうせ、偽者だろう…。人間に失望した人魚たち…。どうして、会いに来ることがあるだろうか」

声には、悲しみと淋しさと、虚しさが入り混じっていた。

噂（後書き）

どこまで続くのか判りませんが、のそりのそりと連いてきて下さいな。

人魚姫

## 声

人魚姫は、深海にある人魚の国の末姫でした。王様や王妃様、五人の姉君や城仕えの者たち、たくさんの人魚ものに愛され、大切に育てられたお姫様です。

彼女は地上に興味がありました。特に、空に架かるといふ七色の橋に。

けれど、地上に行くことは危ないのだと、皆が口をそろえて言います。

面白くありません。人魚姫は、少し見るくらいなら大丈夫だろうと、高をくくりました。

そして、皆の目を盗み地上に出た人魚姫は、爽快な蒼い空に心奪われました。

深海も綺麗な場所ではあるが、これほど清なかではありません。少なくとも、彼女はそう感じていました。

この陽気な空の下で心踊った彼女は、唄を歌わずにはおれませんでした。

人魚姫は夢中になって、美しい声で歌い続けました。忍び寄る魔の手に気づかぬほど、魅入られていました。

人間に捕らえられ、一体幾日が過ぎたのだろうか。

もう永い間、本物の海を見ていないような気がする。

「出して…」

人魚姫は、小さく小さく零こぼした。あとは、すすり泣く声ばかり。

人魚とは、本当に美しい生き物だ。この囚われの乙女もまた、最高の輝きを宿した宝石のよう。

朝の木漏れ日を縋り集めたような黄金の髪はゆらゆらと波打ち、

蒼天を映した海のような翡翠の瞳は哀しみを溢れさせている。白妙の肌は柔らかい曲線を描き、その腰からは桜の舞い散る尾鰭おひれが続く。誰もが、この人魚姫に魅了された。魅了されないほうが、おかしい。

「ごめんなさい…お父様、お母様…みんな…ごめんなさい…言うことを、聞かなかったから…」

人魚姫は、自分の愚かさを嘆いた。誰もかも口を酸っぱくして、地上は危険だと言っていたのに。

人魚姫は毎夜泣き続けた。

「ここから逃がしてあげましょうか？」

そんな折、人魚姫の前に謎の人が現れた。

性別の判断は不可。黒いキャスケットを目深に被り、真黒のジャケットを着ている。均整のとれた体軀カラダを闇で包んでいた。

「私が貴女を助けて差し上げます」

謎の人は、ひどく嘔しゃがれた声で言う。

「…本当に？」

人魚姫は泣きながら、美しい声で聞き返した。

謎の人は、薄い唇を歪める。

「ただし、条件があります」

「なに？」

得体の知れない相手だ…まともな条件を出すとは思わない。人魚姫はコクツと唾を飲み、構えた。

「貴女の、その美しい声を頂きます」

瞬間、この世の終わりを見た気がした。

人魚姫はいつぱいまで目を睜みはり、妖しげな微笑を口許に湛える謎の人を凝視する。

声を奪われてしまったら、もう大好きな唄も歌えない。両親や姉たち、大好きな人たちを呼ぶこともできない。

しかし

人魚姫は<sup>まぶた</sup>瞼を落とした。

しかし、ここには居たくない。

絶えることのない卑しい視線。<sup>こえ</sup>言葉。

あんなものを一生浴びてたくない。

「…解りました。ここで見世物になるよりは、マシです」

人魚姫は瞼を上げた。翡翠の瞳を、くっと強める。

「条件は呑みます…が、ひとつだけ頼みがあります」

「何でしょう」

謎の人は一步踏み出し、人魚姫が囚われている巨大な水槽に左手を触れた。

「人間の姿をください」

人魚姫は胸の前で両手を握る。身体を丸めて、顔を伏せた。

「きつと…この姿では、海に出るまでは不自由です…」

謎の人は、人魚姫の申し出が判っていたらしく、先よりも不気味に口許を歪める。

「いいですよ」

すうつと右手を真上へ掲げた。

すると、水槽の中の海水が渦を巻き始めた。渦は、人魚姫を包み込む。

謎の人は二歩三步と後退した。

水槽と謎の人との間に、渦巻く海水が立つ。

謎の人が掲げていた腕を下ろすと、渦巻く海水はザァツと水泡を四方に散らした。

そして、そこに白妙の裸体を<sup>ひた</sup>晒す乙女が現れる。

亜麻色の髪と翡翠の瞳を持つこの乙女は、先程の人魚姫である。

「ですが、お気をつけて。正体が人魚だとばれてしまった時、貴女は泡となり、消えてしまいます」

人間の姿になった人魚姫は、コクリと頷いた。

「ありがとうございます…」

謎の人は、礼を言う乙女の喉元へ右手の指先を翳す。

ほんのりと淡い光が灯り、それを握り締めた。

「では、確かに頂きました」

と、左手を乙女の方へ差し伸べる。

「それでは、姫様。館の外まで案内いたします」

人魚姫は、謎の人の手を取り、館から脱出した。

## 声（後書き）

さて、大体のあらすじは決まっていますが、どうなることやら。最後まで書けるよう、頑張ります。

## 雨

真夜中になる頃、空には厚く昏い雲が込み合い、ひとつの星も見えなかった。豪雨が降り注ぐ様子は、天が激しく嘆いているよう。雷公までも、怒り轟いている。

「今日は、外が騒がしいな……」

小瑪は、暗い部屋から外を眺めていた。

暗い部屋の中で、白い顔だけがまるで生首のようにボンヤリ浮かんでいる。それもそのはず……小瑪は黒のタートルネックシャツとズボンで身を包んでいるのだから、黒い部分は闇に融けてしまう。

「少し、散歩しよう……」

唐突に独りごち、ユラリと屋外へ出る。一歩出た瞬間に雨が容赦なく打ち、あつという間に身体の芯まで濡れた。結わえていない黒髪は腰まであり、すべて身体にくっついてしまう。が、小瑪はそれらを意に介さない。

やはり、普通ではない。思いつくことが、他者と異なっている。第一、この土砂降りに、しかも真夜中に、散歩をしようなどと思う者はそうそう居るまい。このあたりが、街の人たちから変わり者扱いされる原因のひとつだろう。

しばらく、小瑪は道なりに林道を歩いていた。ここを真っ直ぐ登れば、人魚が捕らえられている館に出る。しかし、小瑪には関心がない。この散歩は、人魚が目的ではない……目的などない。

そうして、フラリと道を外れ、林に入っていく。

ただ足の向くまま、林の中、木々の合間を縫い続けた。

と、小瑪は足を止める。

前方の木立ちの中に、一条の真珠の輝きが見えた。

「……」

気のせいかとも思ったが、無視する理由もないので、木立ちを覗

いてみる。

「あ……」

なんと、輝きの正体は真白な乙女の裸体であった。

亜麻色の波打つ髪を濡れそぼる大地に乱し、ぐったりしている。

「……こんな時間に、こんな場所で、一体……？」

細い顎あごに、繊細な指を添え、考えた。

何にしても、見つけたからには放つてはおけないだろう。

「……仕方ない」

小瑪は、乙女を抱き上げる。その細腕で、軽々と持ち上げた。

人魚浜の傍に、そこを臨むようにして建っている洋館がある。洋館は古めかしく、今にも崩れてしまいそうで、壁には蔦つたが複雑に絡み合っている。広い庭も草が茂り放題だった。もともと、明るさのない洋館だから、雨闇の中に佇たたずむ風景は、吐き気がするほど薄気味悪い。この洋館を訪問するには、容易ならざる勇氣が必要だ。できるなら、近付きたくもない。

その洋館の前に、雨具で身を包んだ男が二人いる。一人はまだ若く、もうすぐ三十に届きそうな面立ちをしており、いま一人は壮年の男だった。

「……ここも、確認を？」

若い男が洋館を仰ぎ、肩を震わせた。雨が冷たいうえ、ここ空気がひどく重たく冷たい。

「仕方がない。旦那様の命令だ」

壮年の男は何気なく言ったが、胸の内ではこの洋館に近付くことを拒んでいた。だが、雇われの身である以上、主人の命令は絶対なのだ。

それでも、洋館の敷地に踏み入るのを躊躇していた。そこへ

「一体、何の騒ぎです？」

「うわっ！……」

突然、暗闇に浮かぶ白い顔。若い男は飛び上がり、壮年の男は僅かに瞠目した。

よく見ると、この洋館の主である。まだ若いのに、病に侵された人のように青白い顔をしている。この雨の中、雨具も持たず、濡れるがままになっていた。

「…脅かすなよ」

若い男は悪態をつきながら、胸を撫で下ろした。

「迷惑ですよ」

間髪入れず、洋館の主が唇を不快に歪ませて言う。

若い男はムツとして思った。好きでこんなことをしてるんじゃない、と。

「失礼ですが…」

若い男の怒りを遮るように、壮年の男は一步前に出た。

「瑞樹さん。人魚を見ませんでしたか？」

壮年の男の丁寧な口調に、小瑪は目を細める。

「物語の人魚ですか？」

壮年の男は、若い洋館の主の瞳がぎらつくのを見た。

「人魚は、物語の世界に飽きたのですか？」

小瑪は鼻で笑い、重く水を含んだ髪をかきあげる。

「人魚は存在している！」

若い男が声を荒げた。壮年の男は、顎を引く。

「ふーん」

興味が失せたように、小瑪は腕を組んだ。

「…ご存知ではないようですから、失礼します」

礼をし、踵を返した壮年の男に、若い男は慌てて追いかける。

## 心（前書き）

大変遅くなりました（汗）　今回は、小瑪の揺れる心を書いてみましたけれど、まだまだ謎です…

## 心

洋館から随分と離れた頃、若い男が苦々しく吐き捨てた。

「何だあいつは！」

「…あまり、関わらないことだ」

「壮年の男が疲れた様子で、若い男に言う。」

「あれは、人魚との交流があった頃から生きていと云われている

…」

「まさか！」

若い男は呆れ顔で、半歩遅れて歩く壮年の男を振り返った。

「…それでは、人間であるはずがない。」

「が、壮年の男の顔は暗かった。」

「人魚にまつわる、もうひとつの物語」

「もう、ひとつ…?」

若い男は眉を寄せる。聞いたことがない。

「まあ、余所よその国から来たお前は知るまいよ…」

「壮年の男は、雨具の下から暗雲たる空を仰ぎ見た。」

「…人魚を殺した男」

その言葉に反応を返すかのように、雷公が激しく駆け抜けていく。

太陽が顔を出すころ、ようやく空は落ち着きを取り戻した。激しい雨音に睡眠を邪魔され、街の人々は寝不足の顔で仕事に向かう。中には、そんなものも意に介さず、ひたすら睡眠を貪あつちった者もいるであろう。そんな者は、羨望と恨めしげな眼差しを注がれること請け合いだ。

## 人魚姫

そうになると、小瑪せうまもその一人になるのだろうか。昨夜は雨の中を散歩し、林の中で乙女を拾い、寝ずに夜を明かした。にもかかわら

ず、彼の顔に寝不足など微塵も感じられない。が、健康体には見えにくい。青白い頬をして、今にも倒れてしまいそう……人々の眼差しは羨望や恨めしげとは違い、奇異なものが多い。もうひとつの人魚の物語を知っている者に至っては、畏怖の眼差しを向ける。

小瑪はいつもの喫茶店で、テラスにあるいつもと同じ隅の席に座り、紅茶を啜っていた。相変わらず、声をかけてくる者は一人もいない。小瑪も、誰かに話しかけようとはしなかった。静寂を好むのか、ただ億劫なだけなのか……はたまた、もうひとつの人魚の物語が真実であるのか、小瑪は他者と隔絶してしまっていた。いや、世界、と言つべきか……

街の人々は、不平を鳴らしながらも、楽しげであった。笑い、泣き、怒り、また笑う。様変わる人々の表情は、見ていて飽きない。見ているこちらは幸せな気分になれる。しかし悲しくもあり、だから小瑪は孤独を望む。人々と交じってしまったら、きっと辛くなるから……

小瑪は、ひとつ吐息した。

「……駄目だな。あの女のせいで、ひどく感傷的になってしまっている」

ポツンと零し、カップの中で生まれる波紋を見つめる。

今は何をしても見ても、心が落ち込むだけかもしれない……

「……こんな時こそ、普段しないことをしてみるのも悪くない」

紅い唇に微笑を湛え、あの乙女を思い出した。

「……家には、女物の服はないからな。裸のままでは困る」

買い物をしてしよう。必要最低限の衣類しか持っていないから、彼女に貸すことはできない。ならばこの機に、衣類を買い替えようか。増やしてみるのもいいかもしれない。

「……勿体ないような気もするが、まあ、思い切りが大切だろう」

肩を竦め、小瑪は席を立った。

心が少し軽くなった気がする……

## 醒

太陽が中天に差し掛かる頃、簡素なベッドに横たわる乙女が目を覚ました。

乙女はすぐに身体を起こさず、首だけを動かして周囲を確認する。ベッドの右脇には四角な窓があり、厚いカーテンに陽光が阻まれていた。色褪せたカーテンは、もう何年も取り替えられていないようである。

窓の傍らには、机と椅子が無造作に置かれ、すぐ横に本棚があった。並んでいる本は、とてつもなく時間を要しそうな厚い物だったり、暇つぶしに読むような薄い物だったり。

さらに首をずらしていくと、右隅に扉があった。ベッドの足下の壁には、大小のチェストが配されている。

部屋にある物はこれだけ。なんとも侘<sup>わび</sup>しい…寂寥感<sup>せきりょうかん</sup>を与える空間だ。

乙女は半身を起こした。シーツが、白妙の肌を滑り落ちる。

…また、捕まってしまったのか。逃げ切れなかったのだろうか。

虚しく視線を落とすと、白い足が目に入った。

…ああ、もう尾鱗<sup>おひれ</sup>はない。人間の姿だ。だから、きっと誰かが助けてくれたのだろう。

そう考え、ほっとしたのも束の間、重大な事を思い出し、苦悶の表情を浮かべた。

…もう声は出ない！

下唇を噛み、乙女は小さく蹲る。泣く瞬間でさえ、微かな音も出ない。

…助けて、助けて！

声が出ないことが、こんなに辛いとは。いや、解っていたはずだ…  
…覚悟を決めたはずだ。

陽光が遮られた部屋は暗く澱み、静寂の霧を孕んでいた。  
だから、あの懐かしい音がよく聞こえる。

「！」

乙女はパツと顔を上げ、耳を澄ました。

ザアアアン……ザアアアン…

紛れもない、故郷の歌声。波の音。

…帰りたい。

海に戻っても、声は戻らないだろう。謎の人は、“声”を持って  
行ってしまったのだから。

…それでも。

翡翠の瞳に故郷の面影を映し、ベッドから離れた。

一糸も纏わぬ姿で、ただ故郷を想う。

扉に手を掛け、ゆっくりと押し開いた。扉が低く低く鳴き立てる。

太陽が家路を急ぎ、朱い足跡を残す頃、小瑪は両手にいっばいの

荷物を持ち、歩いていった。

「…買い過ぎた」

小瑪の後を、同じように荷物をいっぱい抱えた少年が連いていく。小瑪が荷物を持ち切れずに、やむなく雇った地元の子である。心なしかびくついているのは、親か誰かに小瑪の噂を聞いたからだろう。それでも荷物持ちを承諾したのは、小遣い欲しさからか…怖いもの見たさからか…

「…まあ、どうでもいいんだけど」

フウト、吐息する小瑪。

滅多にない機会で、何でもかんでもレジに運んだ結果がコレだ。

腕に通した幾つもの紙袋は肌に食い込んでくるし、積み上げて抱えている箱は視界を遮って鬱陶しいし…しかも、荷物の半分以上は女物の衣類や履物。

「…阿呆だな」

小瑪は微苦笑を洩らす。

店の人も呆気にと取られていた。もうひとつの人魚の物語に関わっているであろう得体の知れない青年が、どれこれ構わず買物する姿は、さぞ奇怪であつたらう。

「やっぱり、変わり者か…。あ…でも、あの女がいつまでも家にいる訳ではないんだ…本当に、買い過ぎた」

小瑪は困つたように呟く。

人々が集う街を出てしばらく、左手に人魚浜が見えてきた。小瑪と少年は、人魚浜側の舗装された道を行き、岬にある古びた洋館を目指す。

ふと、視界の端に動くモノを捉え、左に瞳を移した。

「！……………」

“動くモノ”を見つけた小瑪は目を丸くし、そして細くする。

突然、小瑪が歩を止めたので、少年は小瑪にぶつかりそうになつた。

「わっ、とと…」

少年は荷物を落とさないようにフラフラする。

「少年。この荷物全部を運んでくれ」

「ええーっ!? 無理だよ!」

「何度かに分けて運べばいい。駄賃を倍にしてやる」

「倍?」

少年は上目遣いに、小瑪を見つめた。その熱い視線に気付き、小瑪は唇を歪める。

「三倍だ」

その言葉に、少年は顔をパツと輝かせた。

「わかった!」

勢いよく駆け出した少年の後ろ姿を見送り、小瑪は人魚浜に下りる。

## 瞳

白く細かな砂を蹴散らし、ヨタヨタしながら汀みぎわを目指す。

…海は、もうそこ、そこにある。あと少し。

慣れない足を動かし、一歩、また一歩、海へ近付く。

帰れるのだと思うと、頬が弛んだ。何度も何度も流した泪は涸れることなく、溢れ出す。

…戻ったら、謝ろう。お父様やお母様、みんなに。

夜に向かう空の下で、乙女は故郷だけを見ていた。瞳の奥に、両親や姉たち、みんなが微笑んでいる姿が浮かぶ。

…早く、あそこへ。

もう一歩踏み出せば、波に触れるところまで来た。刹那

「待ちなさい」

「……」

肩を掴つかまれ、乙女はビクツと息を呑む。咽喉のどがピリツと痛み、全身が恐怖で張り詰めた。

「どこに行くんです？ 先には、海しかありませんよ？」

後ろからかけられる、試すような忠告の声に、唇を噛み締める。

あと少しだったのに……

「それとも、海に用があるんですか？」

すべてを知っている風情の口振りに、乙女は瞳目し、慄えた。

…ばれて、しまっているの？

海はそこに在るのに、背後の人を振り切って潜ったとしても、元の姿を見られ、確実に正体がばれる…泡となって消えてしまう。

…今は、戻れない。

臉を半ばまで落とし、氣力を失って身体の力を抜いた。

「…っと。どうしたんです、急に？ 大丈夫ですか？」

背後の人が支えてくれる。肩を抱いてくれていて手が、ひどく冷たかった。

…この人の手、どうしてこんなに冷たいのかしら。心まで凍えてしまいそう。

乙女はボンヤリと思う。と、背後の人が大きな溜息を吐いた。

「…まったく、目が覚めたのはいいが、あなたには羞恥心つてものがないのか？ 裸で外を歩くんじゃない…もつとも、見せたかったのなら止めはしない。それは他人ヒトの趣味であつて、俺が口出しするような事じゃないからな」

「…！」  
「冗談にも聞こえない言葉。」

…なんとという侮辱！

一気に怒りが沸き上がった。

バツと身を翻し、肩にある手を乱暴に払う。同時にその人の頬をひっぱたいた。渴いた音が飴くだまする。

人魚姫

「…」  
そして、その人を視界に収めた瞬間、乙女は時間ときの流れの永眠を

肌身に感じた。

ひとつに結わえた長く艶やかな黒髪：薔薇のような凜凜しさと華やかさを持つ、薄く形のよい唇：肌は一点の穢れもなく、平手で打った左頬が仄かな朱に染まっている。恐ろしく整った美貌だ。

「…僕の言葉が理解できるようで良かった。脳に損傷はないね」

「？」

叩かれ顔を逸らしたまま、その人は呟いた。乙女は訝り、眉を寄せる。

「……………」

ゆつくりと滑らかな動作で、その人の顔が正面に向いた。視線が合わさる。

…ラピスラズリの瞳。

長い睫毛に飾られた双眸に嵌まっているのは、青い宝石：まさしく瑠璃だ。引き込まれてしまいそうなほど、深みのある色をしている。

乙女がその瞳をじつと見つめていると、その人は着ていたカーデイガンを脱ぎ、肩にかけてくれた。

「……………」

乙女はカーデイガンの感触を確かめるように、表面を撫でる。

「…昨日の夜、君は林の中に倒れていた。憶えているか？」

問われて、記憶を手繰った。あの夜：昨日の夜、謎の人と取り引きし、館の外まで案内してもらったが、その後は謎の人と別れ、独りだ。大雨の中、脇目も振らず逃げた。それから、記憶は途切れている。

乙女は、首を横に振った。

「…そう。とりあえず、僕の家に来てもらおうか…君の服は用意してある」

優しく背を押され、歩くよう促される。触れてきた手に、乙女は

ひとつ震えた。

今しがた、作ったばかりの足跡を辿る。

「…一応、自己紹介しておく。僕は端樹小瑪みずき…小さな瑪瑙、と書く。そして、あの洋館の所有者」

小瑪は、岬にある古びた洋館を示して、傍らを歩く乙女に視線を落とした。

「…君の名は？」

乙女は答えるために口を開いて、惑う。声は出ないのだ。辛苦に堪えるように表情を翳かげらせた乙女を見て、小瑪は双眸を細く光らせた。

「…喋らないのか、喋れないのか」

乙女は怯えた様子で、小瑪を見上げる。小瑪は唇を弛めた。

「…君は後者か。とにかく、口を動かしてごらん。普段しているように」

言われた通りに、自分の名を乗せて口を動かしてみる。

「…ルーシャン」

「…」

思わず足を止め、目を丸くした。小瑪が振り返る。

「…違った？」

乙女はブンブンと頭を振り、コクコクと頷いた。

「…どうして、判ったのかしら？」

まじまじ見ていると、小瑪が苦笑を洩らす。

「…何の事はない。ただの読唇術だ。唇の動きで判断した」

簡単なことのように言うが、“ルーシャン”の唇の動きだけでは判らないと思う。“ムーラン”とも“スーザン”とも、いろいろ読めるだろうから。

「…とにかく、声が出なくても、口を動かしてくれればいい。ちゃんと判るから」

そうして、歩き出した小瑪。

信じ難い。が、小瑪なら判ってくれる。

ルーシヤンは一度だけ海を顧みた。

…ごめんなさい。すぐ戻るから、もう少し待って。

亜麻色の髪を波打たせ、小瑪に連いて歩き出す。

洋館への道は途中から舗装がなくなり、茶色の土が剥き出していた。裸足には、少々どころでなく、荒い。

紫紺の空を背に佇む古びた洋館を前にして、ルーシャンは呆然とした。目も口もあんぐりと開いている。目が覚めてここを出た時は、ただひたすら海を追い、振り向きもしなかったのだ。改めて、洋館を見直す。

今にも崩壊してしまうのではないかと危惧を抱かせる洋館の古さにも驚いたが、もつと凄いののは門から玄関までの空間である。まったく手入れされていないそこは雑草が茂り放題。しかも、人の背丈ほどは優にある。辛うじて、玄関までの道は残っているが、あとは何とも言い様がない。ただただ、呆れるばかりだ。

… 凄い場所。本当にここで住んでいるのかしら？

ルーシャンは、小瑪の背に不審の眼差しを送った。彼は手慣れた様子で雑草を掻き分け、サクサク進んでいく。

… やつぱり、ここに住んでいるのね。

げんなりしながら、ルーシャンも小瑪を真似て前進し、置いて行かれないように気をつけた。大袈裟に聞こえるかもしれないが、独りだときつと玄関に着くまでに迷っているだろう。

夢中だったとは言え、よくここから出られたものだ。ルーシャンは自分に感心してしまった。

「… 本当に頑張ったな、少年」

小瑪は、玄関前でへたっている少年を見つけて、苦笑する。荷物

を固め置いた横で、少年が疲れ気味の笑顔を作った。

「荷物は？ 中まで運ぶ？」

まだ息が弾はずんでいる。

「いや、充分だ。駄賃を取ってこよう。少し待て」

小瑠は口許に苦笑を刻んだまま、中へ入った。鍵はしていなかったようだ。

「…なんだ、開いてたのか」

額こほに浮かぶ汗を拭い、少年はポツンと零す。と、荷物の量に見入っているルーシヤンに気付いた。

…これ全部、あの人を買ったのかしら？

眉を潜め、小瑠が買物する姿を想像してみたが、人間の世界を詳しく知らないルーシヤンにはしいかねる。そこで、たぶんそんなに違いはないだろうから、人魚の世界風に想像してみた。

…似合わない、かも。

なんだか滑稽に思え、噴き出しそうになる。

「ねえちゃん」

不意に声をかけられ、ルーシヤンは慌てた。視線を移すと、少年がじいっとこちらを見ている。

「そんなので、寒くない？」

言葉に釣られて、自分の身体を見下ろした。

ルーシヤンはカーディガン一枚しか着ていない。両足は冷たい外気に晒さらされていた。前はボタンをしても開き、手で押さえなければならぬ。見るからに寒そうだが、今はこれだけしか服はないのだ。

人魚姫

説明しようにも“声”がないため、曖昧に微笑み返すルーシヤン。  
「…ねえちゃん、さっきのいちちゃんがどんな人か知ってる？」

「？」

ルーシヤンは、少年に判るよう首を傾げて応えた。

「おれはばあちゃんに聞いたんだけど…ばあちゃんは、ばあちゃん  
のばあちゃんに聞いたんだって…えっと、だから、ばあちゃんのお  
母さんのお母さん、でいいのかな？」

少年はうーんと悩み、まあいつかと頭を振る。

「…でね、にいちゃんはそんな時からずっといるんだって。ホントか  
どうか知らないけど」

ルーシヤンはどう反応すればいいのか判らず、少年が言うのを聞  
いた。

「んで、これはあまり知られてない話。街の人でも、若い人は知ら  
ない。知ってるのは年寄りぐらいなもんで、おれみたいにはあちゃ  
んから聞いたりにしてないとわからないんだよ」

少年は焦らすように間を置く。

「…あのにいちゃん、人魚を殺したらしいよ」

ルーシヤンは、まさかと笑った。そんな話は誰からも聞いたこと  
がない。人魚の話なら、故郷にいても耳にするはずだ。

少年は、ルーシヤンの反応が気に入らなかつたようで、口調を尖  
らせた。

「それで、その人魚の呪いを受けて死ねないカラダになったんだと  
か、言ってた！」

ルーシヤンは人間の卑劣さを聞いたことがある。戦後の人間は、  
人魚を商売道具にしていた、と。しかし、人魚の呪いは聞いていな  
い。

## 話

「もうひとつの人魚の物語、なんだって」  
ザワツと風が通り、雑草が擦れ合い踊る。亜麻色の髪を儘に遊ばせるルーシヤンは、凍りついていた。

…聞いていないのではなく、聞かされなかった？

その一点に思い至り、愕然とする。

考えてみれば、おかしいのだ。真偽のほどは判らないが、人間の世界では細く細く伝えられている。もうひとつの人魚の物語として、忘れられることなく……

人魚の世界はというと、物語は確かに存在する。ただし、人間と交流していた時代の美しい物語と、戦後の人間の卑劣さに嘆く物語……その二種類だけ。人魚が人間を呪う物語は、ひとつもない。

…何か、隠している？

人間の世界にはあり、人魚の世界にはない。単なる偶然で、済ませられるのか。

表情を暗転させたルーシヤンを余所に、少年は続ける。

「…昨日、人魚が逃げたって騒いでたけど、にいちゃんが連れ出して、殺したんじゃないかって言われてる」

腕を組み、思案げな顔つきをした。

「噂だけだね。みんな言うんだ…そのうち、人間も殺すんじゃないかって。それが、もう殺してるかもしれないって」

そんな事を口にしながら、少年はへらっと笑う。

「たしかに、にいちゃんは変わってるけど、おれはヒトを殺すよう

な怖い奴には思えない。もし人魚殺しが本当だったとしても、きつと理由があつたんじゃないかと思うよ」

少年がそう締め括った時、小瑪が戻ってきた。左手には革製の袋を下げて。

「ほら。金貨二百十枚入っている」

目の前に出された袋に、少年が飛びつく。

「子どもが持つような大金じゃないから、ちゃんと管理はしろ」「うん！」

小瑪はまだ袋を放さない。少年は袋を手の中に包み、ぶら下がるような恰好になっている。

「親に問い詰められなくなければ、一度に遣ってしまわないように」

「わかった！」

少年が明快に返事し、小瑪は袋から手を引いた。

袋を大事に抱え、くるりと駆け出した少年の背に、小瑪が呼びかける。

「もう遅いが、独りで戻れるか？」

「平気！ バイバイ、ねえちゃん！」

少年は半身を捻り、ルーシヤンにブンブン手を振った。少年の姿は雑草の中に消え、足音も遠ざかっていく。

「何か話していたのか？」

静かな声で訊かれ、ルーシヤンは首を振った。

「…本当なのかしら。」

ルーシヤンは胸元で両手を握り締める。小瑪を見つめていると、視線が重なった。

「…顔色が悪い。早く中へ。ついでに、荷物を少し持ってきてくれると助かる」

コクリと頷くルーシヤン。小瑪は両腕に通せるだけの紙袋を通し、

箱も持てるだけ積み上げ持った。開け放しておいた玄関を潜くって行く。

だけど、少年の言葉通りだとも思った。

…この人は、理由もなく殺さない。殺したくなかったはず。

そう思ったかったのかもしれない。

やがて、頭を振り、荷物に手を伸ばした。

…どちらにしても、ただの噂。物語でしかない。深く囚こわれることはない。

紙袋四つと箱二つが、今のルーシャンには限界だった。

## 揺

洋館内は暗く、明かりが必要だった。

「……こつちだ」

降ってきた声に仰ぐと、正面にある階段の踊り場に、小瑪が銀の燭台を手に立っている。

蠟燭の小さな炎が、ユラユラ……ゆらゆら……

階段は一段ごとに軋んだ。上りきると左に折れ、真っ直ぐ進む。

扉が一つ、二つ……一番奥の三つ目で止まった。右手にある扉を、小瑪が開けてくれる。

そこは、ルーシヤンが寝かされていた部屋だった。

「……ここが一番マシな部屋」

小瑪は、燭台を窓辺の机に置いた。

「……荷物はそこ」

小瑪の指の先、チェストの横に荷物がまとめられている。ルーシヤンはそこに荷物を下ろした。

「……残りの荷物を持ってくる。ここで待っていて」

つと、ルーシヤンの脇を通り過ぎた小瑪。微かな潮の香りがした。独りにされ、ルーシヤンは落ち着かなげに視線を迷わせる。

机上の蠟燭が、怪しく炎を踊らせ、部屋を照らしていた。しかし、部屋の隅は明かりが届かず、暗い影が蟠わたかまっている。

ふと、本棚に違和感を感じ、その元を探した。

「……」

最初に見た時は気付かなかったが、厚い本や薄い本に挟まれて宝箱のような物がある。あまり装飾はされておらず、玄くろい箱は白い茨に覆われていた。上蓋には、真紅の薔薇が一輪咲き誇っている。

ルーシヤンは近くで手に取って見たくなり、踏み出し

ギイキイイイ……

ルーシヤンはビクツと止まった。

「……ここにある服は、好きなように使って……どうした？」

固まっているルーシヤンに、怪訝な視線を注ぐ小瑪。ルーシヤンは何でもないと頭を振り、微笑した。

小瑪はさして気にした風もなく、荷物の中身を確認し始める。ルーシヤンはこっそり息を吐いた。

「……服はそのチェストにしまっておくといい。何も入っていないから」

説明しながら、自分の服が入っている紙袋をひとつ除ける。

「……出ていく時は持っていってもいいし、いららないと思っただけ置いていくといい」

静かな、何の感情も籠らない声。ルーシヤンは衝動的に、小瑪の腕にしがみついていた。小瑪は僅かに目を見開く。

「……何？」

ルーシヤンはパクパク口を動かした。“声”がないから、微かな音も出ない。

『私……ここにいてもいい？ 出て行かなくてもいい？』

「……そう言ったと思うけど」

ルーシヤンは言葉を探すように翡翠の瞳を彷徨させた。

「……君はどこから来た？ どうして倒れていた？ 声がないのは、何故？」

冷たく流れた質問には、すべて答えられない。

ルーシヤンの瞳に浮かぶ恐怖を見つめ、小瑪は声調を改めた。

「……訊かれたくないんだろう？」

ルーシヤンは俯き、唇を噛む。

「……別に聞くつもりはない。誰だって、話したくないことはある。

僕は、行く当てのなさそうな君を放り出したりはしないよ。……ここが嫌なら他を当たればいいだけだし、出ていきたい時に出ていけばいいんだ」

右腕にしがみつくルーシヤンの手に、小瑪は自分の手を添えた。

ルーシヤンは、瞳を上げる。

「…追い出しはしない。落ち着いて。君はここに居てもいい。僕は、君を詮索しない」

儀礼的に並べられた言葉たち…だけど、声はルーシヤンを気遣っていた。

「……………ありがとう、とう……………」

何とはなく、頭を下げたルーシヤン。どうにも答えようがないのだから、仕方無い。

…大丈夫。正体はばれない。ここに居られる。

なのに、ルーシヤンの心は満たされなかった。求めている、何かを

…私は、どうしたいの？

胸の中で、自問自答する。

…小瑪に、気付いてもらいたいの？ 私が、人魚だということを？

それも、ある。が、確かめたいのだ。

もうひとつの、人魚の物語を 真実を……………

## 名

小瑪は、ルーシヤンの頭をひとつ撫でる。

「好きな服を着て、身体を冷やさないように。寝る前に、蠟燭の火を消して」

風の繊維を集めたような亜麻色の髪から指を抜き、膝を伸ばした。手には、紙袋三つと箱二つ。彼の荷物はそれだけ。

「おやすみ」

紅い唇を柔らかく弛ませ、流れる動作で部屋から出ていく。

ルーシヤンは座り込んだまま、小瑪の手の名残を惜しんでいた。

「冷たい手。でも、温かい。」

さくらんぼみたく熟れた唇に、小さく微笑みを乗せる。

「人間達が着る服って、どんなのかしら。」

ルーシヤンは紙袋を引き寄せ、口を開いた。

燦燦と照る太陽の下で、小瑪はいつもの喫茶店にいた。テラスの隅にある席で、紅茶を啜っている。

「下ろしたばかりの服は、なんとも心を浮かせてくれる」  
フフ、と、頬を和ませた。

黒いタートルネックシャツと皮のパンツは変わらないが、クリアム色のセーターと玄色のブーツが新しい。特に、ブーツがお気に入りだ。滑らかな玄は赤みがかっており、一時に同じ様ことさまをしていない。「しばらくは、これで大丈夫だな」

一口、紅茶を含む。

「…これ以上は、必要ない」

街の人…男、女、子ども、老人…日常を生きる人々。未来を夢見て。

違う時間の中に在る小瑪にも、望みがあった。

それは、常人と大差ないこと。

「…近いのかも、しれない」

吐き出した息に言葉を潜ませ、瞼を下ろした。服の上から、鎖骨の中心に触れる。

眼裏まなつらに浮かぶ、想い人…

「にいちゃん！」

聴覚に響く明朗な声が、物思いに耽る小瑪を現実に戻す。

瞼を上げると、昨日の少年が勝手に正面の席に腰を下ろすところだった。

初めて声をかけられたが…小瑪はふうと吐息し、紅茶を口に運ぶ。「昨日、帰るのが遅かったから、母ちゃんに叱られちゃった。でも、お金は隠しておいたから平気だよ」

少年は得意げに喋った後、キョロキョロし出した。

「…ねえちゃんは？ 一緒じゃないの？」

「…まだ寝ている」

「えー？ おれより寝坊助じゃん！」

少年は大袈裟に反り返り、呆れる。そして、ガタツと身を乗り出した。

「な、ねえちゃんって、にいちゃんの恋人？」

「…違う」

「本当に？」

「…ああ」

「なーんだ」

オモシロくねえと、舌を鳴らす少年。

「…それよりも、少年。仲間に疎外されたくなければ、私に近寄る

な

無表情で口を動かした小瑪に、少年はにやりと笑ってみせた。

「なに言ってるんだよ！ 自慢になるんだぜ、にいちゃんと話してると。みんな、スゲエって言ってる！」

「……」

「しかも、にいちゃんの家まで行って、お金までもらった……」

「……それは、私が少年を雇ったからだ」

「それに、にいちゃん優しい」

「……」

小瑪は僅かに瞠目し、微苦笑を洩らす。

『貴男は、優しいですね』

一呼吸置き、声を出した。

「……少年、」

「少年じゃない」

小瑪が何か言おうとするのを遮り、少年は真剣な表情かおをする。

「エミールだ」

小瑪はティーカップを取り落としそうになった。双眸を大きく揺らし、ティーカップを落とさないよう震える手でテーブルに戻す。

「……どうしたの？」

少年 エミールは、小瑪の様子にびっくりし、自分が何かしたのだろうかと心配した。

「……な、何でもない。気にするな」

「いや、気にするよ。急に……」

小瑪は目を固く閉じ、ゆっくりと深呼吸する。

「おれ、何かした？」

「……何かしたと言えば、した」

「え？」

声を細く細く冷たくし、真っ直ぐエミールを見据えた。エミール

は戸惑うように目を瞬たまたばしく。

「私に近寄るなど言った。邪魔をするな」

エミールは口を結び、瑠璃の瞳を見返した。

「私は、この世界と関わってはならない」

「……辛いね、にいちゃん」

自分の事みたく眉を歪ませたエミール。

「独りは、辛いよ」

カタツ、と、席を立つ。

「……またね」

小瑪が黙ったままなので、エミールは肩をひとつ竦め、駆け去った。

「子どもが、知った風な口を……」

テーブルに両肘を突き、指を組ませた手の甲に額を預ける。

エミールだ。

自分の名に誇りを持つ少年。

小瑪は、再び鎖骨の中心を触った。

「……何故、」

苦しげに呻き、唇を噛み裂いた。緋い、赫い血が、つと流れる。

箱（前書き）

目次が見にくくて、  
すいません《汗》

人魚姫

## 箱

ぼつてりしているカーテンを急ぎ立て、陽光を招き入れた。その時に濃い埃が舞い上がり、ルーシヤンは咳き込んでしまう。

胸元を撫でながら、顔を上げる。

(太陽が、あんなに高い…)

左手を目の上に翳し、深海からは決して見られなかった空を慈んだ。

その空の下には、故郷が腕を広げている。まるで、鏡のように空を映していた。

(…ここは、本当に海が近いのね…)

両手を曇り窓に添え、額を寄せる。軽く身体を凭せた。ワンピースの裾が密やかに揺れる。

このワンピースは、小瑠が買ってきてくれていた衣類の一つだ。たくさんあった中で、ルーシヤンが一番に気に入ったノースリーブのそれは、七色の糸が織り込まれている。上品さと愛らしさで仕上げられていた。

実はルーシヤン、誕生日に姉達から、虹色珊瑚で織られた衣を贈られていた。地上に出てきた時も纏っていたのだが、人間に捕まってしまい、気付けばもうどこにも見当たらなかったのである。

(大好きな衣だったのに…)

臉を下ろすと、五人の姉達が、父母が、大勢の人達が、笑いかけてくれている。

(帰りたいよ…でも、気になるの。あの人…小瑠が…)

翡翠の瞳をぼんやり潤ませ、陸と海との境を見つめる。

時間も忘れ、ただそうしていると肌寒くなってきた、ルーシヤンは小さく震えた。

ベッドに置いてあったカーディガンを持ち上げ、羽織る。

(…いい匂い)

そのカーディガンは、小瑪の匂いが染み付いていた。懐かしい故郷の、潮の香り……

海の側に住んでいるからそのような香りがするのかな、それとも元々の体臭だからなのか…理由はどちらとも採れるだろう。

顔を上げたルーシヤンの目は、自然とあの宝箱へ流れる。

白い茨が絡みつき、玄い箱を束縛しているよう。上蓋には真紅の薔薇が一輪、妖妖しく見張っている。

(とても綺麗…)

箱を手にとると、詰められていた本がパタパタと倒れた。

(何か、入っているのかしら)

他人の物を勝手に触ってはいけないと判っていても、好奇心に押されてしまう。

(ごめんなさい！)

ルーシヤンはぎゅっと目を瞑り、勢いの儘ままに蓋を開ける。

そうして、恐る恐る右目だけを使って見てみた。

(……カギ?)

中には、小瑪の洋館と共に長い年月を経たであろう古い鍵がひとつ。

両目を開き、鍵を見つめた。

(どこの鍵かしら…?)

ルーシヤンは、ぐるりと部屋を見渡す。だが、どこにも鍵穴はない。別の部屋にあるのだろうか。

何の鍵か 小瑪に尋ねることは、できない。愚かな真似をするな、と怒るに決まっている。

(………)

箱を本棚に戻し、扉に向かった。

(…小瑪は、いないのかしら)

古いせいで、扉はいつも鳴く。床も、軋む。それらが、余計に静寂を際立たせた。

何故だか、胸が締め付けられ、心細くなる。

小瑪以外の人間が住んでいる気配はない。

(ここで…こんな場所で、小瑪は独り…)

自分は、ここで独り暮らせるだろうか。

(…私には、できない。きっと、狂ってしまふ。自分はそうと気付かなくても…)

階段の手前まで来て、振り返る。

太陽の位置は高いのに、隅には闇が息づいていた。

(…貴男は、どうなの？ 小瑪…貴男の心は…)

考えても、答えに行き着かない。

…他人ヒトの心なんか判らない。ましてや、相手は人間。住む世界が、考え方が、違う。

## 扉

ルーシヤンはひとつ頭かぶりを振った。

(…それにしても、広い屋敷……物が少ないから、とても) ゆっくりと首を巡らせる。と、すぐ近くにあった扉が、目に留まった。

また、好奇心が疼き出す。

(…ちよつと、覗くだけ)

…その扉も鳴いた。

開けた途端、ムワツと、埃と湿っ気がルーシヤンを襲う。

慌てて、口を守ったルーシヤン。

(………)

部屋の有様は、そう、整然としているのだが、“塵も積もれば山となる”を実現してしまっている。一体、埃は何センチあるのか…

(…スゴイ部屋。でもここだけなの、かも……)  
と、思ったが、小瑪の言葉を思い出す。

…ここが一番マシな部屋。

他の誰でもない、小瑪が言ったのだ。

ルーシヤンは、左にある扉を見た。借りている部屋と、今見た部屋の間にある扉。

(…ここは)

ノブに手を掛け、

キイイ、パタンツ…

薄く開いて中を見て、一秒が経つか経たないうちに扉を閉めた。

(…ここも、埃…！)

次に、後ろの扉を振り返る。

キイ、パタンツ

(埃！)

次は、その右横、ルーシヤンが借りている部屋の向かい。

ギ……

(……)

ルーシヤンは安心すべきか迷った。

そこは書庫のようなもので、埃は言うほどないが、書物で埋め尽くされている。壁一面に並んでいる本棚は、窓まで隠してしまっていた。その本棚に入りきらず、足の踏み場もなく、書物が床に溢れている。とにかく、何百何千冊という書物が突っ込まれていた。

(……)

大量の書物に圧倒され、扉を閉める。

ルーシヤンは、そこから向こうの廊下の端まで歩き、左手側にある扉の前で止まった。

キュイイ……バタンツ

(ダメ、埃！)

へう、と、呆れて肩を落とす。

小瑪のために掃除をしてあげようかと思ったが、気持ちごとくに萎えてしまっていた。

(小瑪は独りだから、部屋はひとつでいいと思ったんだわ。私が来るなんて、思いも寄らなかつたでしょうね……)

ルーシヤンは、カーディガンをパタパタ叩き、埃を払う。

(……じゃあ、小瑪はどこで寝ているのかしら？ 唯一の部屋は、私を使うことになってしまったから……)

思い至り、左斜め後ろを肩越しに振り返った。

まだ見ていない、最後の扉。

(……ここかな？)

二階にある部屋の中で、一番広そうな部屋。

(どんな部屋だろう……)

恐る恐る、ノブに手を掛け

(?)

扉はビクとも動かなかつた。

(あ……)

鍵穴がある。

(ここだ。ここの鍵なんだ…)

ルーシャンは階下を覗き、耳を澄ました。

(…小瑪はまだ帰ってこないよね…)

ゴクリと唾を飲み、鍵を取りに戻る。

…真紅の薔薇が嗤った。ルーシャンの行為がとてつもなく愚かだと　白い茨が、秘密を守ろうとする　暗い底には、鍵が横たわり、成り行きを傍観していた。

(…鍵が掛けられているのは、誰の立ち入りも拒んでいるから。そこにある秘密を、私は暴こうとしている……ううん、秘密なんてないのかも…ただの部屋かもしれぬ。小瑪の部屋…)

心臓をバクバクさせ、鍵を握り締める。

(知りたい。私は、真実を…小瑪を…)

最早、どんな気持ちよりも好奇心が勝っていた。

(小瑪はまだ帰ってこない。ちょっと見るだけ…黙っていれば、大丈夫)

ルーシャンは、玄い箱に背を向ける。

ルーシャンの悪い癖…好奇心に勝てず、高を括る。そのせいで、人間に捕まったというのに、少しも直らない。

(何が、あるのかしら…)

鍵を、鍵穴へ

(やっぱり、ここだった…)

時計回りに、鍵を動かす。

カチツ…

…扉は、鳴かなかった。

その部屋は、冷たい空気を漂わせていた。

他の部屋と違い、塵一つなく、時間の流れを感じさせない。いつかの瞬間が、凍り付けになったよう。

正面に大きな四角い窓が二つある。しかし、カーテンで閉ざされていた。

部屋の中央には、低いテーブルと、テーブルを挟む二つのソファ。広い空間であるのに、それだけの家具しかない。

そして、右の壁には、絵が一枚。額縁は銀で仕立てられていた。とば口からはよく見えないので、絵の前まで移動する。

『！』

ルーシヤンは目を見張り、いつぱいに息を呑んだ。

そこには、海に突き出た岩に腰掛けて、表情を和ませている人魚が……

ダイヤモンド エメラルド サファイア  
金剛石や緑玉石、青玉をちりばめたように鮮やかな海。岩に砕ける波が、藍玉の輝きを放っている。

白金の真つ直ぐな髪は月光に融ける……白蓮の肌は一点の穢れもなく……瞳は月長石をあしらっている……ルーシヤンが知っている誰よりも、美しい人魚。

また、尾鰭も、ルーシヤンが見たことのない銀をしていた。真珠を粉々に、光を保っているよう。

（ ……なんて、なんて綺麗な…… ）

自然に涙が溢れた。胸がいつぱいになり、心を奪われる。

涙でぼやけた視界の中、人魚はある人物と重なった。それは、

（ ……小瑪？ ）

小瑪……人魚は、小瑪に似ている。

思わず、ルーシヤンは手を伸ばし、人魚の輪郭をなぞろうとした。が、伸ばした状態で、止まる。

(小瑪：小瑪は、人魚？)

溜まる泪が、つうと頬を伝った。

(潮の香り……だから、潮の香りが？)

手を引つ込め、カーディガンの袖を鼻先に持っていく。

(でも、どうして？ 人間の )

刹那、脳裏に閃光が走り、影が弾けた。

闇を纏う謎の人……

(あの人：小瑪も、あの人に会った？ それで、私みたいに、何かと引き換えに……)

あ、と、ルーシヤンは口を押さえる。

(ばれたら、泡になる！ どうしよう……小瑪も、私と同じ？)

視界がグラグラした。

(……口にしなければ、大丈夫かしら？ 人魚同士なら……)

頭が短絡してしまいそうだ。

目の前にあるのは、謎ばかり。

本人に答えを求める訳にはいかない。

(…絶対に訊けない。泡になってしまふ危険性があるもの。それに、何より、小瑪が嫌うわ……部屋に鍵を掛けていたほどだもの、ヒトには見せたくなかったんだわ……)

後ろに退るルーシヤン。ソファに背をとられる。

(私は、見てしまった……小瑪が知ったら、きつと……ううん、絶対に怒る)

みるみる目を丸くし、

(そしたら、もうここには、いらなくなる……)

ブルツと慄えた。

(そんなのは、イヤ……！)

秘めた空間から、ルーシヤンは逃げ出す。

鍵を掛け、封印し直した。

肩で息をし、鍵を握り締め

ギギイイイ……

カツと目を見開き、ルーシヤンは扉の前で凍りついた。

…玄関が、主人の帰りを知らせる。

バタアン…

今、小瑪が二階に来たら、ルーシヤンを不審に思うだろう。何をしていたか、確実にばれる。

(どうしよう…どうしよう…!)

足音が階段へ向かってくる。

(ダメ…来ないで…お願いっ!)

ルーシヤンは動けず、ぎゅっと目を瞑り、鍵を握ったまま祈るようにした。

…願いが通じたのか、足音は階段から離れていく。

拒

小瑪は居間にあるソファで、静かに横たわっていた。左の腕で、顔を覆っている。

「…お腹が空いたのなら、勝手に探して食べてくれ。パンぐらいならあるはずだ」

目で確認せずとも気配を悟り、冷たく突き放した。空気がピリピリしている。

(自分の家でさえ、独りにはさせてくれないのか…)

だが、ルーシヤンを招き、少年を雇ったのは、すべて小瑪自身の判断だ。誰にも文句は言えない。

唇に自嘲の微笑みを浮かべ、側に寄ってくるルーシヤンの気配を感じた。

ルーシヤンが服の袖を引く。このままでは、会話が成り立たないからだ。

(不便だ…)

仕方なく、左腕を顔から退ける。すぐ側でルーシヤンが跪き、翡翠の瞳を心配げに揺らしていた。

『…疲れて、いるの?』

「…別に」

おずおずと、細い指が伸びてきて、唇に触れてくる。

『切れる…』

痛みに堪えるような顔をしたルーシヤン。

「…自分で噛み切った。君は痛くないだろう」

『私は、痛くない。でも、痛い…』

小瑪は、じっとルーシヤンを見つめた。

『…何か、あった?』

「…別に」

ルーシヤンの指をそっと退ける。と、唇を意地悪く歪めた。

「…ああ、何かあったとすれば…君がここにしていることだ」

『…小瑪…』

小瑪は腹立たしく舌打ちし、身体を起こす。艶やかな黒髪が、サラリと音を立てた。

(判っているはずだ。彼女に当たってどうする……)

細く息を吐き出し、不安を眉宇に漂わせるルーシヤンの頭を撫でてやる。

「…本当に、何も無い。君は、気にしなくていい」

血に彩られた唇を緩やかに和ませた小瑪。その唇の形が、ルーシヤンの瞳に強く焼きついた。

「…服のサイズは合っているか？」

ルーシヤンは頷く。

「…よく眠れた？」

『眠れた…』

ぎこちなくならないよう、ルーシヤンは小さく微笑んだ。

(…笑わない。少しも…貴男は。貴男の瞳は、笑わない)

瑠璃色の瞳。呑み込まれてしまいそうな深い

「…ヤミ？」

ルーシヤンは、ハツとした。知らぬうちに、口が動いていたようである。小瑪が、不思議そうにこっちを見ていた。

「…闇が、どうかした？」

『な、何でも無い！ あ、えっと…明かりがないと、少し暗いなあ…って…』

慌てて繕うルーシヤンに、小瑪は首を傾ぐ。

「…まあ、掃除をすれば少しは明るくなるんだらうけど……」

天井を仰ぎ、ソファの背に身体を預けた。

ルーシヤンは安堵の息を洩らし、小瑪の膝を揺する。

『小瑪はどこで寝ているの？ 私が来るまで、あの部屋で寝ていたんでしょっ？』

「…ああ。今は、このソファを使っている」

小瑪はソファの表面を撫で、年老いた感触を確かめた。

『部屋はいつぱいあるのに…』

「…どれも使えない」

『掃除すれば、大丈夫でしょう？ 私、手伝う』

「…見たのか、他の部屋…」

感動のない声。

ギクリと、ルーシヤンは口を押さえる。小瑪を上目遣いに見た。

『…ご、ごめんなさい』

“負けるが勝ち”ではないが、謝るが勝ちだ。変な言い訳をするよりも、一番に謝っておけばまず間違いはない。

「…構わないけど、他の場所ではない方がいい。僕だから、君は強く咎められずに済む。それに…」

小瑪は瞼を落とし、ソファに沈む。

「…そう永くは、もう必要ない家だ」

囁かに零された言葉が、ルーシヤンの胸を打った。

(… 必要ない？ どうして？ どこかへ行ってしまふのかしら…?)

目を閉じた小瑪の姿は、これ以上の侵入を拒絶しているようだ。

ルーシヤンが知りたい事は、すべて小瑪の中にある。だから、小瑪が話さない限り、ルーシヤンは知り得ない。

難しい皺を眉間に刻んだルーシヤン。

「…君は表情が豊かだな。君を見ていると厭きないが、気をつけた方がいい。それ故に、顔に出やすいということ…」

降ってきた声に、ルーシヤンは顔を上げる。

小瑪が、唇だけで笑んでいた。

(まるで、泣いているよう… 悲しい)

翡翠の瞳を波立たせる。

(…でも、愛しい…)

## 絵

ルーシヤンはベッドに腰掛け、手の中の鍵を見つめていた。  
太陽はまだ夢の中なので、世界は暗い。ただ、カーテンの隙間から月光が忍んでいた。

(…小瑪…貴男は何者なの?)

人魚であって、謎の人に人間の姿をもらったのか。それとも……

…あのにいちゃん、人魚を殺したらしいよ

声変わりをまだ迎えていない高めの声が、耳の内に響いた。

(あれは…あの人魚は、…?)

親指で鍵を撫でる。

(小瑪が…)

あの絵の人魚は小瑪なのか…小瑪が殺した人魚なのか…

(違う!)

ギョツと、鍵を握り込む。

(小瑪は殺していない! 違う…伝えられているものが、すべて真実とは限らないっ)

しかし、殺していないという証拠もない。

(違う…違う…でも、どっちなの…)

ルーシヤンの心は落ち着かなかった。考えれば考えるほど、不安が募る。

瞼を下ろせば、最近よく流れる影像…暗闇の中で、白金プラチナの髪を風にたゆたわせる人魚が微笑んでいた。

銀色の鱗が一枚一枚、太陽の光を弾く。

そこに、小瑪が現れ、誰にも見せたことのないような柔らかい笑顔  
顔を輝かせた。

二人、手を取り合う。

(ダメ…)

ルーシヤンは背を丸め、歯を食いしばった。

小瑪と人魚は親しく笑い、しかし、小瑪の手には禍々しくも美しい小刀ナイフが……

『ダメ　　！！』

両拳でベッドを打ち、突っ伏した。ベッドが軋む。

ルーシヤンは痛切に悲鳴を上げた。が、音はない。

眼裏の小瑪も、殺してしまった人魚を抱きいだ、虚空へ慟哭していた。

すう、と、瞼を押し上げる。

カーテンの隙間からは、陽光が射していた。

いつの間にか、眠り込んでいたようである。

(……………)

右手を開くと、古の鍵いじえが転げた。掌に型がついている。

ルーシヤンは起き上がり、部屋を出た。

一階へ下りてみるも、小瑪の姿はない。どこかへ出掛けているようだ。

同じ屋根の下にしながら、小瑪に会えない。

元々の生活がそうであったのだろうが、ルーシヤンが起きる頃にはすでに掛かけていて、寝る頃に戻ってくる。

当たり前に、ルーシヤンは独りだった。そんな時、いつもあの部屋で人魚の絵を見つめている……時間の感覚が薄れてしまうほどに。

(……………お父様やお母様は、知っているのかしら……?)

この日も、絵の前にいた。

床に座り込み、茫洋と見上げている。

(……………知らないのは、私だけ……?)

遠い故郷の両親に尋ねるには、人間の姿を捨てなければならぬ。そうならば、二度と地上には戻ってこれないだろう。

(……………貴方は誰？ 小瑪ではないなら、一体……)  
ルーシヤンは無感情な表情をしていた。

(…小瑪とは、どういう関係なの?)

銀色の人魚。

頭を巡るのは、幸せそうな二人と、激しく嘆く小瑪。

(いつまでも、小瑪を虜にしないで…!)

ルーシヤンの双眸は、嫉妬に燃ゆる。

「…君は、本当に詮索好きだね。いつか、災いを招いてしまつよ」  
抑揚のない声に、ルーシヤンは息を詰めた。

## 真

ルーシヤンは鯉のように口をパクパクさせ、扉の側に寄りかかる小瑪を凝視した。

「…僕は、君に言ったはずだ。誰だって、話したくないことがある…と」

腕組みした彼は、いつからそこにいたのだろうか…玄関の軋む音は聞いていない。

「…ここには鍵をしていた。誰でも、入ってはならないことが判るはずだ」

小瑪は一步も動くことなく、驚愕するルーシヤンを見ていた。

『…ささ、め…いつから、そこに？』

「…いつでも構わないだろう。ここは僕の家だ」

『いつ、帰ったの？』

「…それも、君には関係ない…」

ひとつ息を落とし、瞼を下ろす。

「…外を見てごらん」

声に釣られて、ルーシヤンは後ろを振り返った。

大きな窓はカーテンに閉ざされていたが、夜ということは確認できる。気づけば、室内も暗闇に吞まれていた。

『…いつの間に…』

ルーシヤンは唇を動かしたが、それは小瑪に見えない。

「…だが、君ばかりが悪いわけではない。僕にも非はある。ちゃんと説明していなかったのだからな」

小瑪の声の感じが変わり、ルーシヤンは恐る恐る首を巡らした。

小瑪は、淋しげな眼差しで、銀色の人魚に視線を向けている。

(…初めて見た感情が、哀しみなんて…)

ルーシヤンは、じつと瑠璃の瞳を見つめた。

「…絵の存在であっても、心を奪うのだな。」

君は、この絵が気に入ったようだね」

そう言われ、ルーシヤンは複雑な気持ちになる。絵の出来は素晴らしい、しかし銀色の人魚に嫉妬した。

気に入ったのではなく、気になった。

「少年と、」

ルーシヤンは、ハツとする。

「少年と何か話していたな。聞いたのだろうか？　ずっと伝えられている物語を……」

黙り込んだルーシヤンを目にして、小瑪は苦笑した。

「別に、責めているわけではない。知っている人は、知っているのだから」

柔らかな声音に、ルーシヤンは頷く。

「……聞いた。小瑪はもう随分と永く生きていて、……その……それは……」

チラリと、銀色の人魚を横目にした。

「人魚を殺したから？」

ルーシヤンは下唇を噛み、小瑪を見上げる。

「信じた？」

問いに答えようと口を開いたが、唇が震えただけに終わった。

「……気になったんだね、真実が」

コツ、と、小瑪が踵を鳴らし、流れる水の如く歩く。

銀の額縁に、触れた。

「……すべて、真実だ。僕は、人魚を殺した……」

乱暴に殴られたような衝撃を覚える。目を睜り、目の前の現実には打ちのめされた。

「ウソ……」

ガバツと、小瑪の腕を掴む。足がガクガクして立てない。ルーシヤンの体重が、小瑪にかかる。

「ウソっ……」

「嘘じゃない」

小瑪は、ルーシヤンの頭を撫でた。もう何度そうしただろうか。

「…嘘であつてほしかった？」

翡翠の波が大きく揺れ、粒の泪が転げた。

「…君には、関係ないだろう」

『 ウソ、だ…ウソよ！ 違う 絶対 何かの、間違いよ…』

「…間違いはない」

ルーシヤンが知りたかつた真実。しかし、そのような真実をルーシヤンは欲しくなかった。

『 何か、理由が……そうでしょう?!』

必死になつて、継るルーシヤン。

覆らない真実を、それでも否定したいのだった。

## 友

小瑪は人魚を殺した…それが、ルーシヤンの知りたかった真実。しかし、ルーシヤンは、それとは逆の真実が欲しかった。

小瑪が誰かを殺したなど、あつてほしくない…

息だけが荒く零れる。肩を震わせ、とうとうと涙を流した。

「…この絵は、友人に貰った。技倆ていりょうは見ての通りだ」

両手に顔を埋め、掠れたように静かな小瑪の声だけを耳にする。

小瑪は、銀の額縁を丁寧に、慈しむように撫でた。

(…この部屋で…)

スウト、視線を巡らす。

…あれは、一ヶ月近くの旅行から戻って来た時のことだった。

久し振りに家に帰り、吐息していると、彼が急くように訪ねてきた。

『小瑪、いるか？』

玄関で叫ぶ彼に、僕は苦笑を洩らして答えた。

『上に！』

バタバタと、大きな足音が上がってくる。

『小瑪！』

乱暴と思える程の勢いで、彼は部屋に入ってきた。

『ああ、すまない…』

自分でも思いも寄らなかつた勢いなのだろう、扉が壊れはしていないか、慌てて確認をしている。

濃茶色のスラックスに合わせたチョッキ、くたびれたような白い襟シャツ…彼の家庭はそれなりに豊かであるのに、彼は飾った物を着ない。

栗色の髪には癖があり、誠実な容貌をしていた。

彼の名は、デゼロ。

『君が帰ってくるのを待ち兼ねた！』

その彼の腕には、布に包まれた絵画らしき物。

『これを見てくれ！』

青玉の瞳を爛爛とさせ、抱えていた物を僕の前に突き出してきた。

『絵か？』

デゼロはニコニコして、僕が布を解くのを待ち遠しくしてしる。

『…これは……』

それは、人魚をモデルにした絵だった。完成度は非常に高く、モデルである銀色の人魚は今にも動き出しそうな生命感に溢れている。

『…素晴らしい！』

僕の反応に満足したのか、デゼロは頻りに頷いていた。

『そうだろう？ 素晴らしい人魚だろう？』

『え、あ、いや……』

僕はデゼロの技倆を褒めたのだが、彼は勘違いしたようだ。

『君が出掛けて、すれ違いに現れたんだ。本当に美しい人魚でね、

一度見ておくといい！ 銀色の人魚なんて、めつたに見られるもの

じゃないからね！ いつも人魚浜の、“椅子”にいるよ』

鼻から蒸気を噴かんばかりに、夢中に語るデゼロ。

『あと、私はまだ聞いていないが、最高の歌声を持っているそうだ

！ 確かに、綺麗な声をしている……』

あまりの熱烈さに、僕はたじろいだ。

『それは、……そう、か……』

『この絵は、君に譲る』

『え』

『また描くよ。最初のこの絵は、君に貰ってほしいんだ。それに、

君以外には渡したくない』

『…なら、ありがたく……お前の絵は、好きだからな』

『うん！』

デゼロは、僕がしない笑い方をする。顔全体で壮快に笑う彼が、友人であつて良かったと思つた。

デゼロは、最高の親友だ。

…翌日、僕が不在の間の出来事を確かめるため、新聞紙を手にした。

きつと、銀色の人魚のことも出ているだろう。

『死者二百人超える…?』

まず目に飛び込んできたのは、そんな数値だった。詳しく見てみると、ここ一ヶ月の死者数であつた。

しかも…

『さらに、行方不明者が五十人…何故、こんなに…』  
すべては、海でのこと。

人魚浜…

『小瑪、いるか?』

下で、デゼロが叫ぶ。どこか浮かれた声音をしていた。

『小瑪! 最高だ!』

『一体どうした? いつになく騒がしいぞ』

勢いを弱めず部屋に入ってきたデゼロに目をやって、驚いた。

彼は、全身ずぶ濡れだった。

『君こそ騒げ!』

『…騒ぐ理由がないだろう』

『あるさ! 人魚だ! まだ見てないのか?』

『昨日の今日だぞ…』

眉を顰めた僕に構わず、デゼロは興奮している。

『…その恰好はどうした?』

『ああ! 床を汚してすまない!』

デゼロは、自分の身体を見下ろし、気恥ずかしそうに微笑んだ。

『誤つて、海に落ちてしまったんだ』

床には小さな水溜りが転々と出来、デゼロの足元で大きな円にな

人魚姫

つ  
て  
い  
た。

哀

『それよりも、聞いてくれ！　とうとう歌声が聴けた！　言葉に仕様がなない、素晴らしい…！』

デゼロのあまりに熱狂的な姿に、僕は不審を抱いた。

『デゼロ。あの人魚が現れたのは、一ヶ月前だと言ったな？』

『ああ』

『死者が出始めたのも、一ヶ月前だな？』

デゼロの表情が一瞬で硬くなり、視線がテーブルの上へ動く。

『…記事を信じるのか？』

『事実だろう？』

『…それが、あの人魚のせいだと思っっているのか？』

デゼロが、きつく僕を睨んだ。そんな眼をしたのは、初めてだった。

『違うのか？』

『違う！　あの人魚は、エミールは何も悪くない！』

『…だが、人魚が現れた頃と死者が出始めた頃は一致している』

『そんなもの、何の証拠にもならない！』

『デゼロ…』

『小瑪、真実はその目で確かめる』

それ以上、デゼロは口を開かず、僕に背を向けた。

彼を止める言葉を、僕は知らなくて…彼の背を目に焼きつけた。

こんな口争をしたのは、初めてだった。

彼と会ったのは、その三日後…

人魚浜で、氷のように冷たくなっている彼を、見つけた。

彼は二度と、笑わなかった。

「…最初で最後の口争…」

小瑪は、窓の外を見つめた。カーテンで閉ざされた窓…外は見えない、それでも……

(…デゼロは、僕の謝罪も聞かず…仲違いしたまま、逝ってしまった)

彼の笑顔は、今でも、鮮明に、脳裏に弾けるのに…

(…君は、僕の声が届かない場所へ……そして、エミールを……デゼロ、君は怒っているだろうね…)

くと袖を引かれ、ルーシヤンの存在を思い出す。視線を移すと、ルーシヤンが目につばいの泪を溜め、微かに瞳を輝かせていた。

「理由が、あった…その人魚のせいで、友達が死んでしまったのでしよう?」

唇を歪める小瑪に、ルーシヤンは怯む。

「…理由があつて、よかつたね?」

「」

目を睨り、表情を凍らせた。

「…けれど、友の仇ではないよ。僕は、そんな事はしないからね」  
銀の額縁が、小瑪の肩先に触れる。

(…そんな事をすれば、デゼロは僕を許さない。化けて出る程、僕を恨むだろう…)

小瑪は腕組みし、壁に凭れた。

「…憶えておくといい。人間は汚い…僕は、そんな理由がなくても、この人魚を殺していた」

そつと、服の上から鎖骨の中心を押さえる。

「…この人魚と会つて、生まれた想い。消えることのない闇……」

ルーシヤンは、小瑪から目が離せなかつた。小瑪も、半目を伏せ、ルーシヤンから視線を外さない。

「…誰にも見せたくない。触らせたくない。その声も、瞳も、何もかも、僕だけのモノ。誰にも渡さない」

小瑪の細面からは、一切の感情が消え失せていた。

「…そのためには、どうすればいい？」

ルーシヤンの咽喉がヒクリと動く。

「…僕だけの側に置くためには　殺すしかない」

『違う…そんな方法、間違ってる！』

「…そうだね。ちゃんと判っていたさ」

小瑪は腕を伸ばし、ルーシヤンの頭の上に手を置いた。

「…けれど、止められない。これだけの強い想いを、僕は止められない　デゼロを、止められなかったように…」

『…どうして…？　他に、方法はあつたはず…どうして？』

「…判らない？　人間と人魚が、結ばれると思っっているのか？」

『でも…でも…！』

亜麻色の柔らかい髪を、その感触を楽しむように撫でる。

「…君は、幸せ者だね。本当に何も知らない…可哀想に…」

『私、が…？』

「可哀想…」

『　　違う…』

涙が頬を伝い、とめどなく流れた。

『違うわ。可哀想なのは、貴男…。私ではないわ』

翡翠の瞳が、小瑪を映す。

『…貴男は、自分の手で殺したと言つのに、ずっと待っている…その、愛する人を…』

「…そう思う？」

『誤魔化さないで、小瑪』

ルーシヤンは瞳を強くした。

「……………」

その強い光を、知っている。

「…彼と同じ目をするんだね」

小瑪は、唇を弛めた。

「…もう、お休み。こうして起きていても、辛いばかりだろう」

『それは、貴男でしょうか？ ……逃げるの？ そうやって逃げてきたの？』

「……………」

『小瑪！』

「…ルーシヤン、部屋に戻れ。独りになりたいんだ」

『小瑪！』

腕を引かれて立たされたルーシヤン。背中を押される。

『お願い、小瑪！ 過去ばかりを見ないで！ 生きているのだから

…未来を見て！』

ルーシヤンは振り向き振り向き、懸命に口を動かした。

『私は……………私は！』

押し出されて、よろめく。

『小瑪！』

パツと身体を返した瞬間、扉が世界を区切った。

生まれた風が、ルーシヤンの泣き濡れた頬を撫ぜる。

『小瑪……………』

出かかった想いは潰え、ルーシヤンは悲しく頂垂れた。

遇（前書き）

申し訳ありません、少々書き足しをしました。  
皆様には、ご迷惑をお掛けします。

人魚姫

## 遇

生命の源である、海。

世界は蒼く、清らしい……

大陸が見当たらない海の真ん中で、波が跳ねた。

オレンジがかった金髪は太陽光に輝き、海面にたゆたう。

艶やかな美貌の海の住民　海と共に在る者。

彼女は、不安げな表情を巡らせていた。

「…あの子、どこへ行ったのかしら」

深海にある人魚の国の姫君。六人姉妹のひとり、ルーシヤンの姉である。ルーシヤンとは、十も歳が離れている。

名は、セシル。いつまでも帰らない末の妹を心配し、海上まで出てきたのだ。

城の者たちに拘らず、皆が総出になつて探しているが、未だ良い知らせはない。

長姉である彼女は、居ても立ってもいられず、四人の妹を残して城を飛び出したのであった。年長であるということにも、責任を感じている。

しかし、最愛の妹を見出すには至らず、途方に暮れた。

「…まさか、人間に……」

そんな不吉な想像ばかりが、脳裏を過ぎる。

「いいえ、まさか…どこかに迷い込んでいるだけよ…」

セシルは、不吉な考えを頭から追い出すために呟いたが、自信がなかった。

ただ迷っているだけ…そう信じたいのだが、どうしても欲深い人間の像がクルクルクルクル駆け回る。付かず離れず、セシルの精神を揺り削った。

「とにかく、もう一度見回ってみましょう。どこかで、淋しがって

いるかもしれない」

言葉にしていなないと、やるせない気持ちになってくる。

瞬間

「何をしているんですか？」

涼やかな、美しい声がセシルの耳を打った。

ずっと親しんできた、忘れようもない…

「ルーシヤン！」

久し振りの妹の声に、セシルは嬉々とした表情を見せる。

突然行方知れずになり、皆に心配をかけて…その身勝手さを叱つてやろうと思っていた。

けれど、声を聞くと安堵が胸を衝き、言葉にもならない。

今は、すべてがどうでも良かった。妹は、無事だった…！

「ああ、ルーシヤン！ 私たちがどれほど心ば

クルリと振り返つて、セシルは固まった。

視線の先にあるのは、人間の足。

あると思っていた妹の顔がそこになく、思考が停止する。裏切られた現実に、ただ釣られるがまま、瞳を、顔を、上へ動かした。

足から腰、腰から胸へ…

「ダ、レ…？」

真黒のジャケットで身を包み、黒のキャスケットで貌の七割を隠した、謎の人間。

だが、人間が海の上に立てるのだろうか？ …人魚でも、余程力のある者でない限り、そんなことはできない。

しかも、“声”がまるつきり妹のモノだなんて…

セシルは、恐れを抱き、海の中を後退した。

「…どうして、妹の声を…？」

「これですか？」

謎の人は唇を半月に歪め、己の喉元に触れる。

「これは、貴女の妹君を逃がしてあげた時に出した条件です」

「あの子から、声を奪ったの…？」

唄を歌うのが大好きなルーシャンから…

妹の身に降り懸った不幸に、声が掠れてしまっているセシル。

「…そうなりますね」

不気味な微笑みに、鳥肌が立つ。

「…待って…逃がしたって、言ったわね？」

不幸は、それだけではないらしい。

「はい」

「人間に、捕らえられたの?!」

「ですから、それを私が逃がしてあげたんです。彼女が望んだ通り、人間の姿を与えて…」

「人間の、姿…?」

「はい」

謎の人は、コクリと首肯した。

「ですが、これは気をつけないといけません。正体が人魚だとばれてしまうと、泡となって消えてしまいます」

「何ですって!?!」

あまりの事実に、セシルは眩暈を覚える。

新たな不幸だ　人間に捕まった…声を奪われた…逃げ出したのはいいが、正体がばれてしまうと泡となり消えてしまう…

「そんなに驚くことはないでしょう。夜でしたし、人目にはつきません。それに、海に入れば、そういったことはなくなりますから」

謎の人は、ルーシャンが国に戻っていると思っっているようだった。

「…いいえ」

セシルはぎゅっと目を瞑り、唇を震わせる。

「妹は…ルーシャンは、戻っていないわ」

「…はい?」

謎の人は首を傾いだ。

「国には、戻っていない!　だから、こうして地上を見に来ているのよ!」

セシルの必死さを見ても、まだ信じられないのか、唇から表情を

消し、間を置く。

「…………… 本当に、言っているのですか？」

「こんな嘘をつくと思うの？」

「…………… そうですね」

柳眉を寄せたセシルは、眼光を鋭くした。

「ルーシヤンを逃がしてくれたのなら、海まで連れて行ってくれたの？」

「…………… いいえ」

「どうして最後まで助けられなかったの？ 逃がしてくれるのなら、安全な場所まで案内するのが筋でしょう！？」

セシルの剣幕に圧された様子はないが、謎の人は肩を落としていた。

「…………… そうですね。私の落ち度でした。海はすぐ側にあつたので、大丈夫だと思っていました」

「ルーシヤンは…………… ルーシヤンだけではない…………… 人魚は、地上を知らないわ！」

「はい、そうでした。忘れていました…………… 今は全く交流がないことを…………… 」

謎の人は、キャスケットの鍰部分つまを抓む。

「…………… もし、交流があつたとしても、人魚は陸に上がれない」

「判りました。妹君を捜してきましょう」

フウ、と、息を吐いた。

「条件はありません」

「当たり前よ！！」

ぴしゃりと言い切られ、謎の人は肩を竦める。

「ひとつだけ言わせていただきますが、妹君の“声”は戻りません…………… どうして！？」

意表を衝かれて目を丸くしたセシルに、ニコリと微笑む謎の人。

「これは、どうにもならない条件ですから。

むしろ、彼女はこの“声”を持たない方が良いでしょう」

「……貴方は、一体何者なの？」

「……そうですね……代々国を治める者なら、知っているでしょう」

「……お父様が？」

真意が理解できず、セシルは眉を顰めた。

「では、国で待っていて下さい。妹君は必ず貴女の元へ帰しましょう」

そう一礼して、海の上を歩き出す。

後には波紋が続いた。

夢（前書き）

私に、命名力はありません（汗）

人魚姫

## 夢

空も海も蒼く、心静かにただ歩く。

「視界の先に、大陸が見えたきた。白い砂浜が、キラキラと広がっている。」

人間と人魚は共通して、そこを“人魚浜”と呼んでいた。砂浜の左右にはそれぞれ岬があり、向かって左の岬には洋館がある。それは、人間と人魚の交流があつた時代から存在した。

一方、右の岬には人為的な物がない。林の中から鼻を高く突き出しており、その岬の下に自然のアーチがあつた。

アーチを潜ると、“人魚の椅子”と呼ばれるのいくつか岩がある。海上に突出したそれは、ちょうどソファのような形とスツールのような形をしていた。

遙か昔、人魚たちがそこに座り、“集いの席”と呼ばれる空間に人間たちが集い、二つの種族が交流していたのである。

それらの過去を透かすように、謎の人は顎を引いた。海面に波紋を描き、ひとつしかないソファ形の“椅子”にそつと腰掛ける。足を組み、顎に手を宛がった。

まるで過去に耽るような、そんな恰好で、細く細く息を吐き出す。

ルーシヤンを部屋から追い出した小瑪は振り返り、壁に掛かる絵を見つめた。

「…何も知らない……」

コツ、コツ、と、亀の如く鈍く、のろ絵の前へ歩いていく。

「…近くに、いるのか？」

服の上から、鎖骨の中心を押さえた。

胸は熱く、いつまでも焦がれる。

ルーシャンの言う通り、小瑪は待っている…愛する人を。  
小瑪の、望みは……

「…エミール」  
絵の中に存在する銀色の人魚は、あの時のまま……

デゼロの死は、生々しく、小瑪の腕に遺っている。

親友が、手も、声も届かない処へ逝ってしまつて、悲しくない…  
と言える人はいるのだろうか。

小瑪は、彼の死を悼んだ。静かに、騒ぐことなく…

親友は、デゼロだけ…胸にはポツカリ穴が…彼はもう、どこにも  
いない。

「…こんな状態カタチで別れたくはなかった」

以前よりも広く感じられる部屋で、ソファに沈み、両掌を見ると  
もなく見ていた。

「いずれ、別れがあるとは、判っている…だが、こんな、すれ違つ  
たまま…」

ぐつと拳をつくり、蟠わたかまつた感情をどうすることもできず、深く頭  
を垂れる。

首筋にかかる髪は、喪を彩っていた。

「…俺が、記事を気にしなければ、すれ違いはなかった…」  
顔を上げれば、親友の死の原因であろう銀色の人魚が微笑んでい  
る。

「だが、あれは、親友ともの身を案じたからだ…！」

この絵が実物通りであるなら、人々が騒ぐのも無理はない。人間  
には決してない完璧な美を有し、それでありながら近寄り難さがな  
く、愛らしくあつた。大抵は己の美を驕り、刺々しくあるものだろ

う。

本当に美しい人魚だね、一度見ておくといい！

小瑠は薄く微笑を洩らす。

「…そうだな、会ってみようか…お前が薦めるのだから…」  
立ち上がり、歩み、銀の額縁に触れた。

「俺でも、皆と同じように、この人魚に心奪われると思うか？」  
皮肉った質問を親友に向け、コツと踵を鳴らす。

続

白い砂浜に足跡を残し、浜の中程に来て、立ち止まる。

そこは、親友と再会した場所であり、最後の別れの場所であった。

「……デゼロ。今から、人魚に会ってみるよ」

再び、足を前へ出す “椅子” を目指して。

太陽は傾き、赤い泪を零す。地の果てを血色に染めた…凄惨に…

自然にできたアーチの向こうに、人魚はいつもいると言っていた。

「毎日…人魚は、人間の異常な死者数を知っているのだろうか…」

死を悼む者なら、それが堪え難く、一所にいないのではないか。

「だが、一ヶ月の間、人魚はどこへも行っていないようだな…死者が減らないのだから…」

見た目とは裏腹に、残忍な性格をしているのだろうか。

真実はその目で確かめる

親友の言の葉が、胸の底から湧き上がる。

「…そうだな」

小瑪は微笑を洩らし、岬の腹を沿い歩いた。“集いの席”へ続く、細い曲線道をただ前進。

アーチを潜ると、半楕円形の空間が広がる。そこが“集いの席”

だ。海には“人魚の椅子”が、一つ以外空席になっている。

人魚は、ソファ形の“椅子”にいた。

両手に顔を埋め、肩を震わせている。身体を丸め、哀しみに暮れているようだ。赤い陽射しで、ほんのり朱に色付いている。

歩みを止めた小瑪は目を眇め、その景色に魅入った。

（ああ…もしかして、どこへも行けないのか。誰かが死ぬことを理解していても…）

人魚姫

死者は、銀色の人魚に関わりある。

けれど、デゼロは庇っていた。

(お前を、信じる…デゼロ)

と、銀色の人魚が頭を上げる。

純粹無垢な頬は、泣き濡れていた。

大きく見開かれた目…小瑪と、視線が合う。

「匂い…」

人魚は、驚きと哀しみと後悔と、様々な負の感情を<sup>な</sup>緋い交ぜた表情をし、苺のように甘酸っぱそうな唇を動かした。

「ごめんなさい」

何故か、謝罪を奏でる。

一息つく間もなく、弧を描き、海へ…

パシャン …

その夜、待てど暮らせど、人魚は現れなかった。

太陽が射し、小瑪の足下まで忍ぶ。

あれから…人魚が姿を消してから、小瑪は家へ帰るのが面倒臭くなり、“席”で夜を明かしたのだった。

“席”の壁面に凭れ、つらつら眠っている。

すると、海面が跳ね、飛沫<sup>しぶき</sup>が上がった。白金<sup>プラチナ</sup>の髪が陽光を受け、

透き輝く。

昨日の、銀色の人魚だ。

人魚は、ソファ形の“椅子”に這い上がろうと、手を伸ばす。少し高くて上りにくいのが、一番気に入っている“椅子”なのだ。

細い腕に力を込め、不器用に身体を半分預けた時、視界の端に昨日はなかったモノが引っ掛かる。

「！」

ハツと首を巡らし、“席”にあるモノをはつきり認め、びっくり仰天した。

人魚姫

瞬間、肘掛け部分から手が滑り、ひっくり返ってしまふ。盛大に、波が荒立った。

“席”にあったモノは、人間。それも…

（昨日の、人…あの人…）

見間違いでないだろう。

ゴボゴボゴボ…と、泡が視界を覆い舞う。

尾鰭おひれを動かし、鼻から上を海面に出した。

心臓はバクバクして、ちっとも治まらない。

困惑を眉間に寄せ、スイイと“席”へ近付いた。

“席”の下に張り付き、身体を支えて背を伸ばす。

（もう、少し…）

背中が攣つかりそうになりながらも端にしがみつき、じりじりと覗いた

「！！！！」

息を呑むのと同時に、海へ引つ込む。あまりに勢いよく空気を吸い込んでしまったため、嘔むせた。まずい、と、口を塞ぐ。

覗いた先には、瑠璃の宝石があった。鋭く、ヒトの内面を射抜くような双眸…人間は、壁に凭れたまま、目だけを開いていたのである。

（絶対に、見つかった…）

気付かれぬうちに、どこかへ姿を隠すか　と、思った矢先に。

「あ、よかった。いなくなったかと思った」

「！！」

バツと振り仰ぐと、“席”から人間が半身を乗り出していた。人間との距離は、僅か三十センチしかない。

慌てふためき、人魚なのに溺れるかと思ったほど身を凝こらせた。

驚き、緊張し、一刻も早く後退する。

が、しかし、それは人間に阻まれてしまった。二の腕を掴まれ、蒼白になる。

## 謝

「待て、俺は何もしない…だから、あまり動かないでくれ。こんな所で寝てしまったから、身体があちこち痛いんだ」

そんな事を言い、首をコキツと鳴らす人間。

これは、面倒臭がった結果なのだが、人魚は知らない。自分のせいかもしれないと、恐縮していた。

「…エミール、だな？」

見上げると、瑠璃の瞳に、怯えきつた自分が映っている。

「…小、瑪…」

無意識的に呟いたエミールの、インストーン月長石の瞳にも、微かに瞠目した人間 小瑪が映った。

「デゼロに、聞いたのか」

「あ」

エミールは気まずく、顔を逸らす。

「…ごめんなさい」

「俺も、デゼロに聞いた」

以外にも、穏やかな声音だったので、ひとつ瞬き、恐る恐る瞳を移した。

小瑪は 笑う という行為が苦手なのか、その微笑みはぎこちない。けれど、心惹かれる笑顔だった。

「だが、よく俺が小瑪だと判ったな」

エミールは惑うように、瞳を彷徨わせる。

「デゼロと、同じ匂いが……しましたから」

「そう…」

デゼロの言っていた通り、エミールの声は美しかった。穢れの無い、澄んだ音色。デゼロが興奮するはずだ…とても聞き心地が良い。「謝ったのは、何故？」

「そ、れは……」

エミールは口籠もった。

……答えにくい質問だと、判っている。

「……私の、せいで……デゼロが……貴男の親友を、奪って……」

エミールの瞳がじわりと湿り、雫が転げた。

「お前のせい？」

「私の歌声を、聞いてしまったんです……」

エミールから逃げようとする気配がなくなり、小瑪は拘束を解く。

そして、エミールの頭に手を乗せた。

「だが、デゼロはそう思っていない」

「え……」

「デゼロは、お前を庇っていた」

優しく撫で、艶やかな感触を楽しむ。

「デゼロは死んでしまったけれど……彼は、俺に言った。エミールは

何も悪くない、と」

今度は、小瑪は緩やかに微笑んだ。ぎこちなくない、温かな……

いつそ責めてくれた方が、よかった。怒って、憎んで……めっちゃく

ちやに……

「う、ううう……」

エミールは咽喉を詰まらせ、大粒の涙を零した。

可愛らしい貌が、くしゃくしゃになっていく。

「……ごめ、なさっ……！ 誰も死なせたく、ない　　デゼロだって、

死なせたく、なかつ、た！」

エミールは、激しくしゃくり上げた。

「デゼロは、私を友達、だって言ってくれて……私、なんかをっ

私、デゼロに甘えて……近付かないでっ、言えなかった　　デゼロ

と、お喋りする、のが、楽しかった……」

小瑪は黙って、エミールの頭を撫でる。

「でも、デゼロも　　海で、彷徨っている、彼を見つけても、私は

何も、できなかつた……！　　陸地に、連れて行く、ことしか、できな

かっ…

私なんか、近付いたから！

でも、私は、彼を拒めなかった……だって、独りは…辛い…」

「…うん」

「私が、すべての元凶…私さえ、いなければ……」

苦しいな嗚咽は唇に蟠り、泪は涸れることを知らない。

「…ありがとう」

小瑪は瞼を落とし、囁いた。

「デゼロを想って、泣いてくれて」

「私は…」

エミールは横に首を振り、両手を耳に当てる。

「私は、綺麗じゃない…！ 誰かが死ぬ、と判っていて、それでも、

ここを動かさずに！ 独りが、怖いから…私は、自分の事ばかり！」

「きつと、誰でもそうだよ」

「どう、して…？ どうして、私を責めないんですか！？ 私は、

取り返し、つかない事を…！」

ギョツと、下唇を噛み、瞳を強めた。

「うん。普通なら、取り乱すんだろっね。だけど、その人はもう帰ってこないだろう？」

小瑪は手を休めず、ひたすらエミールの頭を撫でる。

「生きているモノは、必ず死ぬ。どんなに永く生きようが、平等に

…覆せない、自然の掟…」

だから、デゼロの死が哀しくても、運命なら仕方ないよ」

双眸を細め、瑠璃の瞳は闇くらく透いた。

## 礼

「そんな、簡単に…割り切れるものなんですか？」

泪は瞳に溜まり、零れそつで零れない。

「俺は、ね」

小瑪は微笑つた。気付いているのか、いないのか…とても切ない仕種。

つと、エミールの輪郭をなぞり、目許に触れた。

「…嘘だ、間違いだ、有り得ない…そんな事を叫んでも無意味だから。哀しいだけ。割り切つて考えれば、少しは楽だよ。」

デゼロは運命の死を迎えた…つて」

「それで…本当に、良いんですか？」

「ああ…」

だが、ひとつだけ、運命に文句がある。

なにも、すれ違つてしまつた時に連れて逝かなくても良いじゃないか。

残された者は、後味が悪い…」

小瑪は肩を竦める。

「それもまた、運命なのかもしれないが…」

エミールは、いっばいに目を見開いた。

「『小瑪が来たら…』」

「え…？」

「『小瑪が来たら、伝えて欲しい。』

…声を荒げてしまつて、すまない。君は帰つてきたばかりで、何も知らなかつたのに…』」

エミールの脳裏に影像が弾ける。

腕には、冷たくなつた彼が、デゼロが力を振り絞つて伝言を遺す感覚が蘇つた。

「『…最後には、信じてくれると思つていた。ありがとう…』

私と君とエミールと…良い友達になれると思っていた。  
他人に関わる事を厭う君でも、エミールとならきつと…

…良い関係に、なれたらろう…

辛い思いを、させて、本当にすまなかった…」

何かに取り憑かれたように喋り出したエミールを、ただ驚きの表情で見つめていたが…

「…デゼロが、そう言っていたのか…？」

「はい…」

「…お前は、本当に、最高の親友だ…！」

小瑪は、くしゃりと相好を崩す。泣くかと思われたが、泪は流れなかった。

けれど、泣いているようだ…

「俺の親友は、生涯でお前だけだ…デゼロ…

ありがとう」

「？」

突然の感謝に、エミールはただ呆然とする。

「…私は、何もしていません…」

「デゼロを見つけてくれた。

彼を、看取ってくれた」

「そんな！」

頬に添えられる小瑪の手を、乱暴とまではいかずも、強く、払った。

「感謝をされるようなことではありません！ つげが、回ってきただけです！」

哀しみよりも、怒りが溢れる。

…私ヲ責メテ…！

…心ガ滅ビテシマウホド！

大切な人を奪ってしまったのに、許されるとはどういうことだろう。

心が完全な闇に染まらない。

どう反応すればいいのか、判らない。

憎まれたなら、まだ対応の仕様があったのに…

「どうして、自分を貶めようとするんだ？」

「

聞き慣れない言葉に、エミールは瞠目し、

(…貶め、る?)

混乱した。

「私が…私を…？」

「…けど、俺が偉そうなことを言えない。

俺と、お前を説教できるのは…デゼロだけだな」

小瑪は苦笑し、先に払われてしまった手をまた元の位置に戻す。

そうして、親指でエミールの頬骨を撫でた。

「この話はこれで終わり。いつまでも、ぐだぐだ言っていたら、埒が明かない」

「……………」

「な？」

「…はい」

脛を下ろしたエミールは、コクンと頷く。

「じゃあ、俺とエミールを巡り逢わせてくれた…デゼロに、感謝し

よう」

「え…」

思わず、小瑪を見上げたエミール。

…デゼロのおかげ？

首を傾げる。

「デゼロから話を聞かなければ、俺はここに来なかっただろう」

エミールは、キュツと唇を引いた。

(本当に…デゼロと知り合わなければ、小瑪を知らなかった…)  
胸の前で手を握り、祈るようにする。

「…私、感謝します。」

デゼロから色々と聞かなければ、小瑪には会えませんでした」

小瑪は“席”に這い蹲つくばったまま、エミールと同じ構えをした。  
「感謝します。」

デゼロが親友で、俺の人生は少しだけ、ほんの少しだけ…明るく色付きました」

小瑪とエミールは視線を合わせ、

「「ありがとうございます」  
声を重ねる。

やんわりと、微笑み合った。

## 想

パシヤン、と、尾鰭で（おひれ）で海面を蹴る。水泡は空を翔け、小瑪の足元で砕けた。

「デゼロは言っていました。」

小瑪は、何も知らない女が近付いてくると、旅行に託けて逃げ出す。と。そして、最低一ヶ月は帰ってこない、と」

「あいつ、誰にでもそういう事を言っていたのだろうか」

小瑪は目を眇め、口を尖らせる。

「それはないと思います」

クスクスと笑声を立て、エミールは風に靡く白金の髪ブラチナを押さえた。

「あと、誰でもいいから早く身を固めてしまえばいいのに…とも。」

「そうすれば、他の女を気にしなくていいそうです」

「人がいない所で好き勝手に…ひとりの女に決めても、そのひとりヒトを構ってやらないといけないじゃないか。何故、俺が、そんな面倒臭い事をしないとイケないんだ。」

それに、デゼロだって誰もいなかったじゃないか」

小瑪は“席”の端に座り、海面すれすれに足を垂らしている。

「もしかすると、内緒で誰かいたのかもしれない」

エミールはソファ形の“椅子”に座り、小瑪との時間を愉しんだ。

小瑪は毎日、厭きずに訪ねに来てくれる。

「それはない。もし居たなら、ここに来るはずだろう」

「あ、そうですね…」

「デゼロも、俺に黙ってはいないだろう。隠し事をするような性格じゃなかったから」

小瑪の声音には、親友への信頼が感じられた。

「貴男を心配していたんですよ」

「他人ヒトの心配より、自分の心配をすべきだ。俺を心配しても、意味

がない」

ツーンと背を伸ばし、腕を組む。

「……小瑪は、他人が嫌いですか？」

「何故？」

「デゼロが言っていました。」

小瑪は他人と一線を引き、自分がその一線を越えられたことが不思議なくらい、冷めている……と」

小瑪は、顔を半ば伏せ、靴の爪先を海面にくっつけた。小さな波紋が円々と広がり、消えていく。

「……失うことが、怖いからですか？」

瑠璃の瞳を上げると、エミールが切なげに眉を寄せていた。

「……私は、怖いです。それも、とても大切なヒトを失うことが……関わらなければ、失わない。なら、見守ろう……」

この想いを、一生眠らせておこう……」

私には、この「」

エミールは、スと喉元に触れる。

「声が……歌声がありますから、必ず失うと判っているんです」  
それでも、離れられない……と、息と共に吐き出した。

「他人が嫌いなら、デゼロを親友とは呼ばない」

小瑪は頭を擡<sup>もた</sup>げ、右肩に預ける。

「……そう、失うことが怖いから、なのかな……」

誰かを失うことで、心が傷ついてしまふのを避けているのかもしれない。

……デゼロのような別れ方は、二度と味わいたくないな。

だから、他人を近寄らせない、近寄らない」

「でも、それは、あまりに極端です」

胸の前で、両手を握るエミール。

「デゼロから、貴男の話を聞いて、淋しい人……だと思いました。」

……私も独り……けど、私とは違う小瑪……」

月長石を脛の奥に隠し、握り締めた手を口許へ持っていく。

「…逢いたい」

愛らしい唇で、甘い言葉を奏でた。

「逢ってみたい…」

どんな人なんだろう、デゼロが親友と呼ぶその人は…

淋しい人…けれど、優しい人」

顔を上げると、空は夜衣を纏い、まあるい月枕を抱いだいていた。

「…俺は、優しくなんかない」

「…いいえ。貴男は優しいです」

エミールは、ゆるりと微笑し、

「デゼロの口からは、貴男の名前がよく出ていました。

私は、逢いたい…と思うようになり、それは日々募り、胸を焦がします」

涙ぐむ。

「…ごめんなさい。私は誰かを想ってはならないのに…私には、禍わざわいしかないのに…」

唇を思わせる甘酸っぱそうな唇が、翳った。

「まだ、逢ったこともない人を、私は…好きに…」

そして、禍を…」

小瑪は目を睜り、ただエミールの音色に聞き入る。

「ごめんなさい。

…でも、好きです……」

想いを口にし、エミールは身体を前へ傾けた。

小瑪が止めに入る間もなく、エミールは海中へ姿を消す。

呆然と、小瑪はエミールの残像を追った。

「……逃げるか、ここで…」

くしゃっと前髪を掻き、唇を弛める。

蜜（前書き）

穴があつたら入りたい…（泣）

人魚姫

## 蜜

あの日から、充分時間を置いた。

私がないから、小瑪はもう来ない。

躍る魚たち、闇を灯す珊瑚…海の底だって美しいけれど、私はあそこが好き。

手を伸ばせば届きそうな空の下、大好きな唄を歌っていたい。

でも、私の歌声は命を殺す…

殺したくないのに、死は否応無しに迫る。

逃げられない…小瑪の言う、運命…

私は、簡単に割り切れない…

人間が死ぬ…私のせいで…

私は禍…禍でありながら小瑪を愛した。

禍、だけれども…私は願う。

勝手だとは、判っている。でも…それでも願う。

…生きて。

どうか、生きて…小瑪…

エミールは視界を開いた。

海が、ずっと先まで続いている。

「…苦しい…」

太陽の光が届かない、海の底は孤独なエミールを圧迫した。

「…空を、見たい…」

あの空の下で、心を鎮めたい。

銀の尾鰭しろがねおしれを翻し、海底を進んだ。

しばらくすると、眼前に七本の柱が見えてきた。“人魚の椅子”である。

その中の、ソファ形の“椅子”の袂たもとに添った。

「…大丈夫。小瑪はもういない…」

自分に言い聞かせ、地上へ向かう。

そうつと頭を出すと、爽快な風が頬を撫ぜた。

“椅子”にしがみつき、空を仰ぐ。雲が威風堂々と構えていた。

地上の色合いに、エミールは心躍らせ、久しぶりの晴れやかな笑顔をつくる。

「エミール」

凜とした、けれど、どこか疲労の見える声に、ギクリと瞠目し、身を強張らせた。

聞きたくなかった 聞きたかった、声。

ひとつ身震い、首を巡らす。

「さ、さめ…」

小瑪はいつも通り“集いの席”にいた。

「やっと、会えた」

黒のスボンに、白い襟シャツ姿の小瑪。

「とりあえず、そこに掛けてくれる？」

微笑んでいるのに、その微笑みが怖い。

いま逃げ出しても、容易に追いつかれそうな気がした。

エミールはビクビクしながら従い、“椅子”に這い上がる。ちょ

んと座り、小瑪と向き合った。顔が上げられない。

「…昨日、雨が降っていたのは知っている？」

訊かれ、思い返してみると…なるほど、確かに海は荒れていた。

地上は雨だったのだ。

頷き、曖昧に首を傾ぐ。

「土砂降りだった。その雨の中、お前がいなか、見に来た。

お前が隠れてから、一日も欠かさず様子を見に来ていた。雨でも

…そのせいで、今日は少し熱がある。頭がポーツとしているよ」

小瑪は自分の行為を嘲るように、唇の片端を上げた。

一方、エミールは恐縮してしまって、肩が上がっている。

「…人魚って、どうやって性交するんだ？」

何の脈絡もなく、唐突に降ってきた言葉<sup>セリフ</sup>を、エミールが理解するには多少時間を要した。

「…え？」

ポカンと口を開けたエミールは、真面目な表情の小瑪を目にして、カアツと赤面する。

「し、知りません!!」

「知らない？ 親に訊いてみたりしない？」

「訊きません!!」

上気した頬を両手で包み、恥ずかしくて身体を縮めた。

「…もしかして、小瑪は訊いたんですか？」

「いや…俺の親は、もうずっと前に死んでるから…」

小瑪は腕組みし、瞳を虚ろにする。

「そう、ですか…」

いたたまれなくなるエミール。

「なら、人間と人魚はできると思う？」

「…まだ、それを訊くんですか？ どうして、そ、そんな事を訊くんですか?!」

「いや、気になったから…」

「気になっても、訊かないで下さいっ!! 答えられる訳がないで

しょう! 貴男には羞恥心がないんですか？ そんな…そんな事、

よく口にできますね…」

小瑪はクスツと微笑った。

「…できると思う？」

「ですからっ」

バツと顔を上げて見たモノは、小瑪が前のめりに倒れる瞬間。

目を丸くしたエミールは、金縛りにあつたように動けなかった。

ドボンッ…

小瑪は海に落ち、浮き上がってくる気配がない。

…小瑪は、体調が優れないのだった…

明

「さ、小瑪！」

蒼白になり、“椅子”から身を乗り出したエミール。  
その下の海が盛り上がり、

「!?!」

ザバアと小瑪が現れた。

驚き、呆然としているエミールの唇を、すくい上げるようにして奪う。

「」

小瑪は幽玄な微笑を口許に閃かせ、吐息もかかる近さに留まった。  
「なら、キスはできる？」

悪戯っぽく小首を傾げる。

エミールは丸くしていた目を細め、潤ませ、閉じた。緩く巻いて  
いる睫毛が濡れている。

「……訊かないで、下さい……」

「今度は、逃げないのか？」

「小瑪……」

月長石の瞳を上げ、小瑪の頬に手を添えた。小麦色の滑らかな肌  
だ。

「……逃げられると、思いますか？」

小瑪は微笑を湛えたまま、再度エミールの唇を攫った。

『愛している』

口中へ囁き、深く……深く交わる。

空では真昼の月が、笑っていた。

僥倖がカーテンの隙から忍ぶ時分、ルーシヤンはベッドに蹲り、“声”のない咽喉で叫んでいた。

矛盾と後悔が、彼女を苛む。

（覚悟を、したはずなのに…！）

こういう時にこそ、“声”が必要なのだ。

（小瑪には届かない！！ 私の叫びが、届かないっ！！）

ぐう…と拳を握った。爪が、皮膚を裂いてしまっくらいに、強く…

（声を、渡さなければ…よかった…！）

泪が溢れ、シーツに染みをつくった。

（…でも、あの人に助けてもらわなければ、小瑪には…逢えなかった愚かなルーシヤン…！）

どうして、他の条件にしてもらえないか、訊かなかったの！？）

下唇を噛み、息だけで呻く。

『小瑪…』

全身から力を抜き、虚ろな瞳を現した。

『…小瑪…』

部屋の隅の暗闇が、謎の人を模る。かたじ

ルーシヤンは、その幻想に手を伸ばした。

『返、して…』

さくらんぼのような唇を震わせる。

幻は嗤った。生者の立ち入りを拒む、昏い場所せかいに属するモノ…

それは、言った。

“声”は二度と、貴女には戻りません…

ルーシヤンの声で。

『返し、て…』

クスクス、くすくす…囁かな笑声が訝する。こたま

『…助けて…』フラツと、伸ばした腕が落ちた。

幻の背後に、数々の影像が流れる。

父、母、五人の姉たち、城仕えの者たち、国の人々……

『…ごめんなさい…』

ルーシヤンはただ謝罪した。

（私は、してはならない恋をしてしまった…人間を、愛してしまっ  
た…

この想いは、決して消えない。いつまでも、私の心に在り続ける  
…）

ならば、故郷に戻ってしまったら、もっと辛くなってしまつので  
はないか？

今でさえ、これ程近くにいるというのに、満たされないのだから  
…小瑪を見ることもできなくなってしまったら、きつと…

（ 心は永遠にひとり恋い焦がれたまま…）  
僅かに瞠目した。

（そんな、苦しいのは…イヤ…）  
そして、それは永久とわに叶わぬ恋だから…

幻の隣りに、小瑪が現れる。

（想いが、叶わないのなら…）

失くした声…

偽りの姿…

泡となり消えてしまう危うさを秘めた身体…

（正体を、明かしてしまおうか…）

想いだけでも、せめて…小瑪の胸に残って…

のっそりと上半身を起こしたルーシヤン。ベッドが低く軋む。

裸足のままで、床に立った。

頭を傾ぐと、亜麻色の髪が頬にかかる。

…ごめんなさい…

王宮の一室で、セシルは窓辺に腰掛けていた。

窓からは、人魚たちが暮らす家々や魚たちが木の葉のように揺ら

く珊瑚の森が見える。

国は穏やかで、寂漠とした流れに包まれていた。

ふと、末妹の、ルーシヤンの声が聞こえた気がして、顔を上げる。ルーシヤンと同じ翡翠の瞳を、苦く微笑ませた。

「あの子の声は、もうないのだったわね…」

痛ましく眉を寄せ、小さく首を振った。

（一体、あれは何者なのだろう…）

ルーシヤンを必ず帰すと言った、あの謎の人。

（人魚の事…について、随分と詳しいようだったけど…）

海の上を歩く、奇怪な力を持った者。

…代々国を治める者なら、知っているでしょう

確かに、そう言った。

（…お父様が、何を知っていらつしやると言うの…？）

セシルは背を伸ばし、父王を探しに部屋を出る。

広く長い回廊を行くと、すれ違う城仕えの者たちが笑顔で頭を下げてくれた。

やがて回廊が開け、目の前に巨大な門が現る。青磁色の堅牢な門は、謁見の間に続いていた。赤色の珊瑚で織られた絨毯が、扉から玉座までを繋いでいる。絨毯の両側には、円い柱が三本ずつ立ち並んでいた。

ここに、父王の姿はない。

「…どこにいらつしやるのかしら…」

ふう、と、顎に指を当て、周囲に首を巡らせた。

「セシルお姉様？ 何をしていらつしやるのですか？」

少々沈んだ声音に振り返ると、葵色の真つ直ぐな髪をした長妹・

アレイスが、百合のような美貌に哀愁を漂わせていた。

アレイスの横には、紫色の波打つ髪を持った次妹・ミスティが。

「お父様がどこにいらつしやるか、知らない？」

「お父様、ですか？ …私は、存じません。ミスティは？」

アレイスは、左隣りのミスティを見る。目尻が下がり、天然の優

しさと妖艶さを秘めた容貌をしていた。

「わたくしも、存じませんわ……」

ミスティは鼻にかかった、癖のある喋り方をする。

「そう……」

ありがとう」

セシルは小さく微笑み、身体を返した。

妹

「セシルお姉様」

ミスティに呼び止められ、セシルは肩越しに振り向く。

「ルーシヤンは、まだ見つかりませんか？」

不安で身を縮めるミスティ。普段は謎めいた雰囲気を持つ次妹だから、その姿は本当に痛ましい。

「大丈夫よ」

セシルは年長者として安心させるため、柔らかな表情をし、ミスティの肩を抱いた。

「必ず戻ってくるわ。」

ルーシヤンは後先考えず行動することがよくあるけれど、ちゃんと戻ってきていたでしょう？

今回も、大丈夫よ」

国中がルーシヤンを想っている。ルーシヤンがすることについて口を出していたのは、すべてルーシヤンを心配してのことだけど、それが却ってルーシヤンには煩わしさになっていた。

ルーシヤンの跳ねっ返りな行動の原因はそこにあり、皆を悩ませる結果となっている。

だが、ルーシヤンを叱り注意することはあっても、嫌いになることはない。

無事に戻ってきて…と、誰もが願う。

(しかし、無事とはいかない。あの子は“声”を失ってしまったのだから…)

皆、それを嘆くかしら…きつと、嘆くわね)

セシルは微苦笑を洩らした。

人魚たちは親身になって、面倒を見てくれる。

(…生きていてくれるだけで、幸せなんだわ。

失ったのは“声”だけだから、生活には困らないもの…」  
ミステイが、うつすらと浮いていた涙を指先で拭い、もう平気だ  
ということを示すように頬を和ませた。

「そうですね。ごめんなさい、皆が辛いのに、わたくしっしたら…」  
恥ずかしそうに俯く。

セシルはミステイの頬を撫で、

「きつと疲れているのよ。少し休むといいわ…アレイスも」

アレイスの肩を軽く叩いた。

「私はお父様に用があるから」

「はい。セシルお姉様も、無理はなさらないで下さい」

アレイスが律義に頭を下げたので、セシルはクスクス苦笑する。

妹たちと別れ、回廊を進んだ。

やがて、人氣が失せ、王宮の中でも静かな場所に出る。

王宮の最奥、真緒しんじゆの扉は、謁見の間の扉よりはこぢんまりとして  
いた。

それは、追憶の間への扉。

追憶の間には、代々の王たちが眠っている。それぞれ、絵の中で  
あつたり、像の中であつたり…

ぐるりと丸天井の部屋を見渡していて、ふと突き当たりの白壁が  
細く割れているのに気付く。

「…何、かしら…?」

一筋の光をなぞっていくと、白壁の切れ目が広がった。

セシルは目を睜り、白壁の向こうに現れたもうひとつの部屋を見  
る。

半楕円形のそこは、天井が遙か上にあつた。そして、何も知らな  
い魚だけが通ることを許される、細く長い窓がひとつだけ。

「お父様…」

部屋の中央に、父である、この国の王がいる。

緩慢に振り向いた父王は、理知的な容貌をしていた。ブロンドの  
長い髪は、それを引き立てるように波打っている。セシルとアレイ

スはこの父王に似ていた。

珊瑚や貝で織られた衣に覆われた身体は、がっしりと逞しい。

額には藍玉アクアマリンのサークレット。藍玉アクアマリンは、王の証である。右手には、身の丈もある巻き貝の杖ステッキ。

「セシル」

低く流れる声が、腹に響く。

「このような場所があると、私は存じませんでした」

セシルは父王が持つ威厳に圧され、肩を強張らせた。

「ここは、王位を継いだ者しか知らぬ」

「ここは…それは、何ですか？」

父王の背後にあるモノが気になって仕方がない。

純白の像　何かを祈るように瞳を閉ざした人魚。真っ直ぐな髪は清らかで、高貴な美貌に反して唇は母の如く愛らしい。人魚からは、白いイメージしか伝わってこない。

父王は半身を返し、像を見た。

「…これは、悲劇。人魚が犯してしまった罪のカタチ」

「罪…？」

その言葉の響きが、セシルを困惑させる。

「十一代目国王が御代の時、人間の世界では終戦してまもなく三年が経とうとしていた…」

と、娘に視線を戻し、双眸を細くした。

「この時代、人間の世界がどのように荒れていたかは…知っているな？」

セシルは黙って首肯する。

「人間達は、我等を物のように扱った。人間に捕らえられ、命を落とした者は数え切れぬ…」

その頃から、交流は途絶えがちになった」

父王はひとつ瞬き、また像を見た。

「そうして、願ってしまった…人間に劣らぬチカラを。これ以上の死者を出さぬ為…」

その願いの下に生まれたのが、この者……」

「チカラ……」

無意識的に呟くセシル。

「……声……」

海に立つ謎の人が、眼裏を掠めた。謎の人は、ただ不気味な微笑を湛えている。

待

その日も、小瑪はエミールに会うため、白い砂浜を歩いていた。自然のアーチに近づくにつれ、鼓動が高くなる。今日も、エミールは笑っているだろうか。

「？」  
と、アーチ周辺の波だけ荒立っているのが目で確認できた。その空間だけ、狂っている。

小瑪は不審げに眉を寄せた。瞬間、身体が凍えた。狂乱する波の音に交じって、聞こえる…哀しみに濡れ、怒りに燃え、憎しみに滾る歌声が。

「…エミール？」  
ただならぬ気配に、小瑪は金縛り状態から脱した。走り出したが、眩暈と吐き気に襲われ、ガクツと膝をついてしまう。身体は慄え、言うことを聞かない。

「エ、ミ……」  
口許を押さえ、眉間が痛み出し、歯を食いしばった。

「っ」  
歌声は止まず、小瑪を苦しめる。

「エ、エミール　！！！！！！」  
小瑪は声の限りに叫んだ。  
呼ばなければならぬ気がした。  
独りで、泣いている…

「…」

歌声がピタリと消え、小瑪は肩で息をする。苦痛から開放されたものの、まだ頭が眩んだ。

「エミール…」

萎える足を叱咤し、エミールの元へ急ぐ。ひこずった足跡が砂浜に残り、打ち寄せる波に消された。

波は、随分と落ち着いている。

「エミール…」

ソファ形の“椅子”に座るエミールを見て、小瑪は愕然とした。

やはり、エミールは泣いている。いつも綺麗に流れている髪がばらけていた。丸めた身体は震え続け、白蓮の肌はあちこち傷を負い、血が滲んでいる。

反射的に、小瑪は海に飛び込んでいた。

「エミール」

ソファ形の“椅子”に上がり、肘掛部分に腰掛ける。

「人間か。こんな事をする奴は、他に思い当たらないからな」

エミールの頭を、自分の胸の中に包んだ。

「お前を、捕らえようとしていたのか…」

微かに、エミールが頷く。

「網を、投げて…きました…私は、怖くて、逃げようと思いました…」

…

「その時に、負った傷か…」

エミールは小瑪の服を掴み、憔悴した様子で瞳を揺らした。

「小瑪…私は、私はその人間たちを、殺して、しまいました…」

小瑪の背に、冷汗が這う。

先の、あの歌声…あれは、危険だ。

「私は、我を忘れて…」

エミールは嗚咽を上げ、激しく嘆き、後悔していた。

「…もう、いい。確かに、殺してしまうのはよくない事だろうけど

…お前は、何も悪くない」

小瑪は、エミールの髪を梳くように撫でる。

「お前が危ない目に遭っていたのに、側にいてやれなくてすまなかつた」

「……貴男は優しいですね」

目を細めて笑んだエミールの瞳から、涙が一粒零れた。

「……貴男こそ、何も悪くありません」

「エミール……」

小瑪は、エミールを上向かせる。

（お前を、誰にも渡したくない。）

お前が笑ったり、泣いたりする相手は、俺だけでいい。

誰も、エミールに触るな……！）

エミールの唇を自分のそれで奪った。

乱暴な口接けに、エミールは柳眉を曇らせる。小瑪の背に回した手に力を込め、縋り、容赦ない蹂躪に溺れた。

父王はセシルに視線を定め、微動だにしない。

「そう……歌声は、心を求めては、奪った……」

歌声には、闇の力が宿っていた」

ゴクリと唾を飲むセシル。

「お父様……その悲劇と、ルーシヤンは関わりがあるのですか？」

「……何故？」

「正確には、ルーシヤンの“声”だと思っておりますが……」

セシルは躊躇うように、半目を伏せた。

「先日、」

くいと顔を上げ、真っ直ぐ父王を見る。

「ルーシヤンを捜しに、海の上へ行きました。そこで、ルーシヤンの“声”を持つ者に遇ったのです。」

その者は不思議なチカラで海の上に立ち、私に言いました…ルーシヤンはその“声”を持たない方が良い…と」  
父王の表情は変わらず、セシルの話聞いていても、驚きも何も  
しない。

「私が何者かと問うと、代々国を治める者なら知っているだろうと  
答えました。

お父様、何かご存じのですか？

歴代の王たちは、一体何を受け継いできたのです?!」  
今にも泣き出しそうな娘を見、父王は瞼を落とした。

「…ただの悲しみでしかない。

そして、未だ終わらぬ…終わらぬ限り受け継がれる。

だが、我等は手出しできぬ…待つしかない…」

セシルは理解し兼ねるといふ顔をする。

伝えられていながら、何もできない…ならば何故、伝えてゆく  
か…

(ルーシヤン…早く戻ってきて。“声”は仕方がないようだけれど、  
貴女は無事に戻ってきて…!)

ただ待つ身は辛かった。

セシルも…

王も…

小瑠も…

再（前書き）

本文に書き忘れがあり、修正いたしました。読んで下さっている皆様には、ご迷惑をお掛けします。

再

ルーシヤンが部屋を出ると、ちょうど小瑪も部屋から出てきた。

『小瑪…』

視線が合うも、逸らされてしまう。ここで逃したら、もう二度と逢えない気さえた。だから、小瑪が雲隠れしてしまわないようにと、早足で階段を塞ぐ。

「…何か用でも？」

フウと鼻から息を抜かし、前髪を掻き上げる小瑪。

ルーシヤンは、小瑪の右手を取った。

『小瑪。私を“人魚の椅子”へ連れて行って』

「…それなら向こうの岬にある。ひとりでも行けるだろう」

『いいえ。小瑪も来て』

翡翠の瞳は、強い決意の光が宿っている。

…何の決意か。

小瑪はそれらすべてを見透かしたように、双眸を揺らした。

「…判った」

承諾を得、ルーシヤンはひとつ華やかに微笑む。

『ありがとう』

決意した女は、まことに美しい。それが、命を懸けたものなら、

尚更…

白い砂の破片カケラが宙に躍り上がり、舞い落ちる。

ルーシヤンは生き生きとし、自らも舞いながら最後の場所へ向か

った。

傍はたから見てみると、歌声と笑声が聞こえてきそうな微笑ましい光

景なのだが…

( 熱い )

小瑪は鎖骨の中心をぎゅっと握った。額には汗が浮いている。

(…火に、焼かれているようだ…)

意識が朦朧として、身体のバランスを崩した。ガクリと膝をつく。

(いるのか、そこに…)

薔薇の唇を微かに動かし…

……エミール……

はしゃいでいたルーシヤンは、小瑪の異変に気付く。

『小瑪!』

慌てて駆け寄り、砂浜に突っ伏しそうになる小瑪の肩を支えた。

『顔色が悪いわ…大丈夫?』

と言つても、小瑪は元から顔色が悪い。

ルーシヤンは小瑪を労わり、背を撫でてやった。

『小瑪。このまま進める? もう、後へは戻れないの…ごめんなさい』

本当にすまなさそうに、小瑪の顔を覗き込む。

狭まる視界の中で、小瑪はルーシヤンの言を読み取った。

弱弱しく首肯する小瑪。

…小瑪も進まなければならぬのだ。

ずつつと待つていたのだから…

立って歩むために、片膝を立てる。

「捜しましたよ、姫様。どうして、真っ直ぐ海に出なかつたのです?」

前方からの美声に、ルーシヤンは目を瞠った。

「貴女の姉君に怒られてしまいましたよ」

瞳を動かし、顔を向け…いつの間にか現れた足、腰、胸…謎の人がそこにいる。相変わらず闇を纏い、不気味に微笑んでいた。

自分の“声”を、別者の口から聞くとは…なんとも薄気味悪い感覚だ。

人魚姫

『…貴方が…どうして、貴方が私の“声”を…?』

思わぬ再会と“声”が使われていることに、ルーシヤンは戸惑いを隠せず、詰まりながら口を動かした。

「そんなに驚くことはないでしょう？ 貴女は私と取引したんですから。この“声”をどうしようが、貴女にはもう関係ありませんよ」

謎の人は喉元を押さえ、軽やかに微笑んだ。

「それに、これはもともと私の“声”です」

「貴方…の？」

「はい。たまたま、貴女の中に宿っただけです」

ルーシヤンは訳が判らず、瞳を彷徨わせる。

「貴方、の？ なら、私の……」

ならば、ルーシヤン自身の“声”は、どこにあるのか…

謎の人はルーシヤンの呟きに答えず、肩を竦めた。

「っ」

と、傍らの小瑠が一層苦しみ出し、肩を激しく上下している。

「小瑠！？」

ルーシヤンはハツとして、小瑠を見、

「…楽に、なりたいですか？」

「？」

謎の人の言葉こえに不審を抱き、また謎の人を振り仰いだ。

「！！！」

そうして、謎の人の右手にある短剣を目にする。

仰天している間に、謎の人はそれを突き出してきた。

「ダメ！！！」

本能的に身体を張り、小瑠を庇うルーシヤン。

短剣がかすめ、亜麻色の髪がハラハラと落ちた。

差し迫った死に戦おのきながらも、ルーシヤンは謎の人をきつく睨む。

「何て事するの！！！」

「貴女を傷つけるつもりはありません。貴女を姉君の元へ帰すと約束

束しましたから」

キヤスケツトの下、色の悪い唇は無感情だった。

「その者を庇う理由がないでしょう？　どきなさい…でなければ、貴女を傷つけてしまいかもしれません。私は万能ではありませんから、邪魔する者は避けられませんか」

「構わない！　小瑠が殺されそうになっているのに、見逃せるはずがない…私は、小瑠の盾になる！」

伏した小瑠を背後に、ルーシヤンは両腕を広げる。恐怖を押し伏せ、胸を張った。

「だって、私は小瑠を愛したから…愛する人を、殺させはしない！」

すべてを呑み込む強さを宿した翡翠の瞳を向けられ、謎の人は鼻白み、一旦短剣を下げる。

ややして、くつくつ笑い出した。

扱う者によって、これ程印象が変わってしまうのか…“声”はひどく禍々しく、ドロドロした憎悪が詰まっていた。

「人間を…よりもよって、その者を愛したのですか、姫様」  
押し伏せたはずの恐怖に挫けそうになり、ルーシヤンは歯を食いしばる。

「…それを見ても、まだ愛はありますか？」

謎の人は唇を歪め、短剣の切っ先をルーシヤンの肩越しに向けた。

小瑠を…小瑠の、鎖骨の中心を。

「？」

ルーシヤンは柳眉を寄せ、小瑠を横目にする。

小瑠の喉元は、先制攻撃により服が裂けていた。

「小瑠！」

怪我をしたのではないかと蒼白になり、

「小瑠、ケガは…!？」

小瑠に覆い被さるようにして屈み、血が流れていないことに安堵した。

だが

小瑪の鎖骨の中心には、白熱した輝きを放つビー玉大の玉がある。「それが何か、ご存知ですか？」

冷やかな声に、ルーシヤンは答えられず、ただ目を見開いていた。

それは、“人魚の玉”<sup>（まぎょく）</sup>と呼ばれる、人魚の心臓である。宝石と同等、いや、以上に美しく、戦後は人間の間で売買されていた。

その“玉”を小瑪が所持しており、しかも“玉”の半分は身体に埋まっているではないか。

「…私の心臓」

渴望の呟きに、ルーシヤンは顔を上げた。

「……貴方、の……？」

「ええ」

ということは、いま謎の人の身体に心臓はない…

何故、心臓のない器で立っていられるのだ？

「嘘ではありませんよ」

ルーシヤンの心を察したのか、くすりと鼻を鳴らした謎の人。短剣の刃をなぞり、手に持て余す。

と、ようやく小瑪が正気を取り戻し、ようやくの体<sup>（てい）</sup>で身体を起こした。

「！ 小瑪…大丈夫？」

ルーシヤンはぎこちなく小瑪を支える。

「…貴男は変わりませんね。私の“玉”の影響を受けているとはいえ…その髪の色と瞳は…」

謎の人は腕を組み、力なく面を上げた小瑪<sup>（あまげ）</sup>を嘲った。

「…君も…」

小瑪は、ルーシヤンの支え手から離れ、膝をついた状態で両腕を

前へ伸ばす。億劫そうに、けれど確実に。

「変わらない…」

謎の人の顔を両手で包み込む。

「触らないで下さい！」

払いのけようとする力に逆らい、両手を上へ滑らせた。

「やめ　　！！」

キヤスケツトを掴み、謎の人が拒むのも構わず、取り上げる。

ルーシヤンは思わず後退り、口を張った。“声”があつたなら、

確実に悲鳴を上げている。

謎の人はキヤスケツトを奪われた瞬間に両掌で顔を覆つたが、ルーシヤンは見逃さなかつた。キヤスケツトから零れたのは、艶を失くした長い白髪。バサバサに乱れ、そこで絡まっている。露わになつた貌は、皮膚がガサガサに乾燥してしまい、罅割れ、爛れていた。

あまりの醜さは直視しかね、恐怖から引き攣つたように這い退がるルーシヤン。

謎の人は両手で貌を隠していたが、意味のない行為だと思つたの

だろう、

「ハッ！」

短い嘲声を発し、ダラリと両手を下ろした。

「よく言いますね！　貴男に“玉”を奪われ、私はすべてを失いました！　変わらない？　貴男の目は節穴ですか！？」

…気がついたら、何もなく…あつたのは、この短剣だけでした！

謎の人はカツと目を開き、短剣を振り翳す。

「私は待ちました…すべてを取り戻すまで！」

…「エミール…」

吐息と共に流された音に、ビクンと反応をする謎の人。

ルーシヤンは愕然とした。

（あの絵の、人魚…？）

謎の人が、あの美しい人魚エミール。  
輝く美貌は醜く歪み、かつての面影はまったくくない。

(…本当、に…?)

小瑠が言うのだから真実なのだろう、が…信じられない。

謎の人は慄え、凍り付けになったかのように、その場から動かない。

「エミール…」

小瑠は柔らかく両腕を広げ、エミールに近付いた。

「　　ッ…」

エミールは奇妙に双眸を眇め、ゼイゼイ喘ぐ。

小瑠に抱かれたエミール…ルーシヤンは胸が潰れる思いだった。

(そんなモノを抱かないで…！)

私を見て！

そんなモノより、私の方がずっと、ずっと綺麗！

私だけを、見て　　(…！)

どす黒い激情が、ルーシヤンの心を支配する。

ルーシヤンは、激情が爆発してしまわないように胸元を押さえた。

そして、

「…！！」

息を呑み、小瑠の背に顔を覗かせている短剣の切っ先を認める。

エミールが握り締める短剣は、深々と小瑠の左胸を貫いていた。

「あ、ああ…あ…」

頭の中が真っ白になる。沸き起こった激情でさえ、姿を消した。

「さ、小瑠え　　…！！」

ルーシヤンは息だけの悲鳴を上げる。

月明かりの下、小瑪はテラスに佇み、たくさんの星を映した海を眺めていた。

日が暮れ、月が世界の舞台へ向かい始めた頃、エミールと別れた。不安げな表情を見せるエミールには、安全のため海底に隠れていると言っておいた。

「海の底は、あまり好きではありませんけど、小瑪が言うならそうします」

と、エミールは小さく笑んだ。

明日の夜明けにまた会おう…小瑪は約束した。

「できるだけ、独りにはさせない」

そう言ったら、エミールははにかみ、

「…小瑪は優しいですね。ありがとう…」

何度目かの言葉を唇に乗せた。

潮風が、肌に沁みる。

…この想いをどうすればいいのだろう。

エミールを愛し、独占欲が胸をかき立てる。

…誰にも見せたくナイ…

孤独を知り、怖れるエミールの、時に見せる心の底からの微笑みは、幸福感のある包容力に満ちている。真っ暗闇に灯るささやかな光のよう。

…誰二モ聞カセタクナイ…

耳を撫ぜるあの清涼感に溢れる音楽的な声。その歌声は危険に満ち、甘く切ない。

…誰二モ触ラセタクナイ…

柔らかな唇は吸うごとに熟れ、艶かしく、可愛らしい。

…自分ダケノモノニスルニハ…

小瑪は手摺てすりに寄りかかり、頭を抱えた。

エミールと共に生きたい…誰の手にも渡らないようにしたい。月ムネ長石の瞳メクリには、自分だけを映したい。他のナニモノも、エミールには必要ない。

(違う…そうじゃない。ただ二人だけで、平穩に居たいだけ…邪魔しないでほしいだけ…)

生きたい…殺シタイ…

(殺したくなんかない!)

暗闇の世界から、声が囁く。紛れもない、小瑪の声で。

…デモ、イツカ、誰カガ攫さらツテイク…

…エミールハ、自分以外ノモノデモ喜ブ…

…愛デルノハ、自分ダケデイイ…

…自分ダケノ側ニ…

…逃ゲラレナイヨウニ…

声は止むことなく響く。すべて、否定できない自分の心。けれど、「やめろ！」

それでも小瑪は目を背けようとする。背ケラレナイノニ…

(違う。生きたい。俺たちは…二人だけで…！)

唇を噛み締め、もう一人の自分を殺そうとした。殺セナイノニ…

…エミールモ、ソレヲ願ッテイル？…

「当たり前だ！」

…本当ニ？…

「小瑪は瞳目し、息を詰めた。

(エミール、は…？)

エミールも、自分と同じように願っているのだろうか？

小瑪には、答えが出せない。そうであってほしいと願うのに、エミールが遠い。

人間よ

夜闇に訝する声が、立ち昇る海の音と共に注ぐ。

小瑪は驚いた風もなく、丸めていた背を伸ばした。心の乱れを、一瞬で呑み込んだ。

「…一国の王が直々(じきじき)に、何の用です？」

涼やかな唇の片端を上げ、皮肉に言う。

海上に現れたのは、まさしく海の王であった。神秘なる月光を孕んだ長い髪は、寄せては退く波のよう。自然の叡智が窺える容貌に、形容し難い双眸。すべてを見透かしているような、千里眼の力を感ぜさせる、水晶の眼だ。

王だと思っか？

くすりと鼻を鳴らした小瑪は、自らの額を指差すことで、相手の額を示した。

「人魚の世界では、アクアマリン藍玉は王の証」

小瑪の示す通り、拳大のアクアマリン藍玉が額に輝いている。

…いかにも。我は十一代目国王を冠せられておる表情という表情もなく、王は頷いた。

先の質問だが、察しがついておるのではないか？

「…さあね」

瑞樹の末裔。東の果てより来し一族。

我ら人魚属と人間属を繋ぐ者よ

ハア、と、吐息する小瑪。

「その役目は、もう担っていません」

そうであるうな

特に嘆くわけでもなく、王は首肯した。

瑞樹の者よ。

…これが、人魚属と人間属の最後の交流となるであろう…

私の望みを聞いてはもらえぬか？

「……」

しかし、そなたは拒めぬであろう。

彼の者については、そなたは誰にも譲りたくないであろうからな

小瑪は瞼を下ろし、手摺の冷たさを手の内に感じる。

(…エミール…)

銀の煌しつがねきが、眼裏をかすめた。

人魚姫

王（後書き）

偉い人の喋り方は難しいですね（汗）

柱のような形態をした海の一部に深海の王は立ち、淡々と言葉を奏でる。

彼の者を殺めてほしい

「ハツと目を開き、小瑪は王を見上げた。

彼の者が愛したそなたの手で、逝かせてやってほしい

「……何故……？」

彼の者もまた、やり過ぎたのだ

小瑪は半ば顔を伏せる。予想通りの言葉だな、と思った。

人間属：全てと言う訳ではないが、人間は我等を物の如く扱った。心臓を奪われた者や商品として売られた者は数え切れぬ。

そして、彼の者もまた、命を殺め過ぎた……

ここで初めて、王の表情が揺れる。この世から希望を見失い、まるで彷徨い続けている者のようだ。

彼の者の声は、闇に属しておる。我等の望んではならぬ想いが、彼の者にチカラを与えてしまった。

我等は己の過ちを認め、決めねばならぬ

確かに、人間もエミールも命を殺し過ぎた。だが、だからと言って、個人の命を他人がどうこうできるのか？

「……エミールを殺すことで、すべてが解決する……？」

左様……

しかし、我は彼の者を殺められぬ

「……それは、同属を殺すという嫌悪から？」

王は首を左右に振った。長い髪がユラユラと神秘的に舞い揺れる。出来るなら、我の手で終わらせたい……

だが、出来ぬ……

「俺なら、出来るとでも？」

小瑪は大胆にも王に対し、突慳貪つげんどんな態度をとった。そうしても、王は怒いからない。

己が心に問うてみよ。そなたの中には強い想いが宿っておるそれに口を噤んだ小瑪は、じつと王を見つめる。

彼の者は…

小瑪の視線を真っ直ぐ捉え、王は続けた。

彼の者はもう、“生きる”ことを望んではおらぬ

…ホラネ…

暗闇の世界から、もう一人の自分が蘇る。

(うるさい！ 今は消えている！！)

強く想い放ったが、衝撃は大きかった。

出逢つてからの日々は楽しかったはずなのに、エミールの心はこの世から離れようとしていたのだ。

「…何故…？」

小瑪は咽喉を詰まらせ、思考を巡らせる。

答えは簡単だ。

そなたを死なせたくないからだ

歌声を聞いた者は、甘美か苦痛かどちらかの死が訪れる。小瑪も危うく死んでしまふところだった。

必ず失うと判っておるから、失ってしまう前に…失った痛みで彼の者が暴走してしまわぬように…

そなたの手で…

「…俺は、居ただけなのに…」

両手で両眼を覆い、絶望した。

「二人だけで、居ただけなのに…！」

エミールは、死にたいと思っている？

案ずるな。彼の者も、そなたと共に在りたいと思っておる

「なら、何故、死にたいと思う？ ……何故、確信を持って言えるんだ…！」

故に、身を引こうとしておる

王の声音が、少し強まる。

そなたが殺らねば、彼の者は、己で己が命を絶つ！

小瑪は薄く口を開いた。

彼の者を救ってやってくれ。そなたの手で、彼の者の望むままに

…

静かに、静かに、王は音を紡ぐ。

短剣を。我の鱗を使つておる…

「…まだ、頼みを聞くとは言っていない」

ここに、置いておく…

カチンと、金属音が手摺の上に生まれた。

「…勝手だ…」

ひどく掠れた声で、小瑪は呻く。

「…あんたも、エミールも…デゼロも…この世界も…」

王は何も言わず、小瑪の言葉を待った。

「…誰も存在を認めないと言つなら、この世界が消えてしまえばいい…」

無意味な、願い。

「ただ共に在ることも許されない世界なら、必要ない。

在るのは、お互いだけでいい…」

…ケレド、エミール八望ンデイナイ…

「違う。エミールも望んでいる…だから死を求めるんだ」

エミールも共に在ることを望んでいて…仲を認められなくても、

世界は消せなくて…だから愛する人を傷つけてしまう前に、自ら死を選ぶ。

手の下から、泪が溢れることはなかった。泣き出しそうな声だけ

れども、雫とならない。

…理解しておっても、望む。

彼の者に罪はない。それを罰しようというなら、罰する者が滅べばよい…

無意味で、どちらを選択しても、彼の者は傷つき、嘆く…

王は、哀しく洩らした。

我は、彼の者に幸福を与えられなかった…もう、そなたしかおらぬ。彼の者に幸福を…

小瑪は両腕を下ろし、霧のかかった瑠璃の瞳に短剣を映す。月の輝きを反射させ、硬質な哀惜を宿していた。

…我が、子を、頼む…

形のよい指は、短剣の柄を握る。

海の一部は形態を失くし、王は深海へ帰っていった。

短剣の重さが、命の重さを語る。

…行コウ…

…夜ガ明ケタラ…

…俺達ガ愛シ合ウ結果ガ…  
コタエ

…ソコニアルナラ…

…行カナケレバナラナイ…

声は蜿蜒えんえんと諭した。

「…行くさ」

短剣を胸の高さに戴き、ポツリポツリと雨滴のように眩く。

「誰のためでもない…」

持ち上げた双眸から、

「自分のために……！」  
霧が晴れ、瑠璃の光線が閃いた。

機（後書き）

いろいろと、心が混雑してますね…（汗）

人魚姫

## 動

純白の像を見上げる父王の額では、藍玉アクアマリンが威光を放っている。

「詳しくは判らぬ。だが、十一代目は確かに、この者の命を瑞樹の末裔に託された」

王が受け継いできた悲劇の顛末てんまつを聴き、セシルは自らを抱いだいた。

「親が…子の命を好きにしてもいいのですか？ 子は親のモノですか？」

その人魚も、瑞樹の末裔も哀れです…ただ生を受け、出逢い、愛し合っただけなのに…」

「故に、悲しみだけでしかない…二度と繰り返されぬよう、王位継承と共に伝えられる」

父王が、微かに目尻を下げる。

「…十一代目は、この者を追うようにして亡くなられた。自ら命を絶ち、償おうとしておられたようだ」

「それは、」

セシルは、胸前で拳を握った。

「それは、身勝手ではないでしょうか？ 仮にも、人魚属を統べる

王…子だけではなく、他の者の命運もかかっています！

王としては、国が危うくなってしまう！」

「王として、親として…十一代目は心を痛めておられたらう」

「…それでも、何か方法が…！」

きつと、見つけれなかったのだらう。だから、子の命を託し殺め、自らも命を絶ったのだ。子へのせめてもの償いとして…また、王としてはもう起てないことに気付いて…

「…ルーシヤンの“声”は、この者の“声”であらう」

セシルは目を丸くして、父王を、象を見つめる。

「では…では、私が遇った、あの、ルーシヤンの声を持つ者は…？」

父王はひとつ瞬き、肯いた。

「この者…十一代目の子、エミールである」

コツ、と、杖を床に当てる。

「…ようやく、悲劇が終わろうとしているのかも知れぬ」

気がつけば、エミールの像が弱くだが発光し始めていた。

瞬間、小瑪の許にある“玉”が眩い輝きを放つ。

光が短剣を伝い、エミールへ流れていった。

小瑪に抱きすくめられているエミールは、苦しげに驚愕し、双眸を濡らしている。

「…どう、して…？」

震える声で、いま在る光景に疑問した。

瞼を重たげに閉ざしている小瑪は唇を和ませ、クスクスと鈴の音に似た笑声を立てる。

「何故？ …君は、僕から心臓を取り戻してきたのだろうか？」

「そ、う……です……」

「僕も、待っていた。君に心臓を返すために……」

ほう、と、息を吐く小瑪。

「君と共に在るために……」

強く、甘い想いを耳にし、ルーシャンもまた涙した。

二人を引き離すことは叶わない。即ち、ルーシャンの恋も実らない。

太陽がまだ、水平線の向こうにいる頃、小瑪は屋敷を後にした。星の子達が降り注ぐ人魚浜を、ひとり歩み、途中立ち止まる。振

り返り、屋敷を仰いだ。

…あそこに帰るつもりは、なかった。エミールと共に在るために、何もかも捨てる。

小瑪は決意し、もう一人の自分を認めた。だから、声はもうしない。

全部が自分だから、認めてしまうのは簡単だった。

ただ、愛し合うだけ…

点々と残る足跡がやがて波に消されるように、小瑪とエミールも静かに融けていく。

太陽はまだ顔を出さず、下弦の月だけが小さく笑っていた。

エミールが来るまで“集いの席”で待っていていようと考えながら、自然のアーチを潜った小瑪。

「あ、れ…？」

月光に輝くモノが目を引き、何気なく視線を送って苦笑した。

「…まだ、夜明けじゃないけど？」

くつくつと肩を揺らしていると、ムツとした美しい声が飛魚のよ  
うに飛んでくる。

「笑うことはないでしょう！ 貴男こそ、夜明けはまだですよ？」

夜明けに会おうと約束したのに、エミールはソファ形の“人魚の椅子”にぼつねんと座っていたのだ。

「約束を違たがえましたね、小瑪」

「それは、お互い様」

正論に、エミールは返す言葉がない。その様子を愉しげに眺め、小瑪は首を傾げた。

「夜明けに、と言ったはずだけど、何をしているんだ？」

むつつり唇を尖らせたまま、エミールは言う。

「…星を、見に…」

「そうか…」

「？」

ふと顔を伏せた小瑪の気配がいつもと違う気がして、エミールは

怪訝に眉を寄せた。

「小瑪…？」

呼ぶと、小瑪の身体が揺らぎ、

「あっ」

そのまま海へ落ちる。

そうやって、いつも突然に海へ身を沈める小瑪。傍<sup>はた</sup>で見ているエミールには、心臓に悪い。

「小瑪…」

エミールは吐息し、側に現れた小瑪をひとつ睨んだ。

黒い髪が水分を含み、光沢を帯びる。微笑んだ小瑪は艶かしく、反対に視線が逸らせなくなってしまう。どれも、いつもある風景<sup>コト</sup>。

「エミール」

耳元で囁かれ、エミールは頬を染める。

「な…んですか…」

肘掛の部分に腰掛ける小瑪から少し身を引いた。

「愛してる…だから…」

触れてきた唇。

エミールは目を睨り、近過ぎてぼやける瑠璃の瞳を見つめた。そして、すつと細くし、双眸を微笑ませる。目尻から、音も立てずに雫が溢れた。

「…一緒に逝こう…」

呪

小瑪の手に握られた短剣はエミールの胸を貫き、深々と命を捕らえている。

「小瑪……」

唇を触れ合わせたまま、エミールが小瑪を呼んだ。

小瑪の瞳にも、涙が浮いている。

「……俺も、すぐに逝く……」

とめどもなく流れる泪。

「最後まで、見届けて下さいね」

エミールはそれに苦笑を返し、小瑪の顔を両手で包んだ。

エミールにとって思いもしない事態であつたらうに、エミールはすべてを受け入れていた。

「泣かないで下さい。私は、ずっと貴男の側にいますから」

微かに頷く小瑪の額に口付け、また唇を合わせる。

「ありがとう、小瑪。私は、幸せでした。初めて、生まれてきて良かったと思えました。貴男の……貴男とデゼロのお蔭です」

エミールはくすくす笑った。息は途切れるようになってきているのに、決して苦痛を表に出さない。

「小瑪、これは私の願いです」

小瑪は短剣を握り締めたまま、涙を流し続けた。そんな小瑪を、エミールが抱き締める。

身動いだ小瑪は、短剣がこれ以上進でしまうことを怖れた。

「貴男は、何も悪くありません」

何がきっかけで小瑪が動いたのか……人魚の、しかも懐かしい、薫りのする短剣をどこで手に入れたのか……知らない。知らないけれど、これでいいのだと思う。

見ず知らずの者に殺されるより、愛する者の腕の中で果てたい。

小瑠が今こうしていなければ、自分で命を絶つていただろうから。独りで逝くよりも、誰かに…小瑠に、側にいてほしかった。勝手かもしれない…でも、これでいい。

これで……

「…エミール」

小瑠を抱く<sup>いだ</sup>エミールが、見る見る光となっていく。

「すぐに…すぐに逝くから！」

小瑠は声を震わせ、一時でも離れることに怯えた。

もし、いま離れて、再び会うことが叶わなければ…？

「大丈夫…大丈夫です、小瑠。だから、私の最後のお願いを、聞いて…」

さすがに耐えられなくなってきたのか、エミールが双眸を眇める。息が切れ切れに、短くなった。

「小瑠、愛しています」

涙も儚く消えていく。

「愛しています。私の分も生きて…」

「え…！」

小瑠は愕然と顔を上げた。

「何を！ 俺もすぐに逝く！」

しかし、エミールは首を横に振る。

「いいえ。あなたは生きて…私が生きられなかった分も…貴男まで、死なないで…」

「馬鹿なことを言うな！ お前なしで、生きていけるはずがない！」

「私は、貴男に呪をかけます。そうすれば、自分で死ぬことは叶いません…」

「…」

小瑠は、あまりに残酷な願いだと思った。そんな願い、聞けるはずがない。

「ごめんなさい。貴男に、選択の余地はありま、せんね…すべて、私の独断です…」

苦笑いを浮かべる顔が痛々しすぎ、小瑪は絶望で視界を揺らした。

「……エミール…どうして…？」

「貴男を、愛しているから…」

何度も何度も口接吻を交わし、愛を囁く。

「私は、貴男に、生きてほしい」

「…俺は、お前と一緒に生きたい」

「でも、それだと、いつか、貴男を殺してしまうかもしれません…」

そんなのは、嫌です」

「俺だって、嫌だ！」

今こうしていることも、自分のためだと覚悟したのに…

次第にエミールの感触が薄れてきた。

「エミール！」

一緒には逝けない。小瑪は独り…エミールも…

「駄目だ、エミール！」

何もするな！

小瑪は必死に叫んだ。しかし、エミールが深く口接吻に来て…

(ああ…)

完全に呪がかけられたことを悟る。

涙が溢れて、止まらない。

「愛しています、小瑪」

瞬間、エミールは光となって弾けた。

光の欠片カケラが小瑪の周りで舞い、散り散りに消えていく。

キイイン…と、小瑪の手から滑った短剣が“椅子”の上で跳ね、

海の底へ落ちていった。

破

「　　つつ！」

胸が、鎖骨の辺りが一瞬焔を上げたように熱かった。

小瑪はそこを押さえ、襟を開いて直じかに触れてみる。

鎖骨の中心には堅いモノが嵌っていた。それが、温かくて…

「エミール…？」

小さく零し、それを撫でる。

「これ、は…」

“人魚の玉”と呼ばれている、人魚の心臓。

エミールは心臓を小瑪に遺し、そうして呪をかけた。側にいるという言葉と共に…

「　　だけど…」

「こんなの、一緒にいることに、なるものか…！」

小瑪は身体を丸め苦しげに喘いだ。

短剣は海に落ちてしまっている。

「　　…生きられるわけがない！」

舌を噛み切つてやろうかと顎を動かした時、“玉”が熱を帯びた。

「　　……」

小瑪は思い止まり、“玉”を撫でる。

「　　…邪魔をするのか…」

お前の熱を感じると、気持ちが悪くなる…」

エミールは、自分で命は絶えないと言い遺した。

まるで、小瑪の内で息衝いているよう。

「お前が、いるようだ…お前は、もういないのに…」

小瑪が死ねば、“玉”は力を失うだろう。エミールの、完全なる

死…だ。

愚かな真似はできない。

「エミール…」

小瑪が生きていれば、“玉”は、エミールは存在する。  
泪はまだ流れていた。

「…酷いな、エミール…」

だが、独りであることに変わりない。

愛する人も、友もない…生きる意味が、あるのだろうか…

いや、あるのだ。小瑪が生きていれば、“玉”が生き続ける。エミールが存在する…それが…それだけが、残酷なまでの生きる意味。エミールはいない…でも、小瑪の中に在る。

だから、死ねない。

「…っ」

小瑪は慟哭した。

天地を揺るがす程、けれど碎ける波の音に消されていく。

月が哀しみに濡れ、姿を隠した。

ルーシヤンは息を詰めて、状況を見守っていた。見守ることしかできない。

割って入ることは許されない、そんな雰囲気フラチナが流れていた。

短剣を伝う光は、エミールにすべてを返していく。白金の髪も、

白蓮の肌も…ルーシヤンが見た絵の通り、美しい、本来の姿に。

『ああ…』

その幻想的な美麗さに、ルーシヤンは思わず吐息してしまう。

と、短剣が音を立てて碎けた。

シヤアア　ン…辺りに閃光も撒き散らす。

『っ！？』

ルーシヤンはバツと身構え、目を固く閉ざした。

「……………」

瞼の奥で、次第に光が失せていくのを感じる。  
浜に打ち寄せる波と、すすり啜り泣く声が音の世界を支配していた。  
恐る恐る、ルーシヤンは瞼を上げる。

光が霧散しただけで、やはり小瑪はエミールを抱き締めていた。  
しかし、今度はエミールも抱き返している。

小瑪の肩に顔を埋め、くぐもった声を絞しぼった。

「…どうして…私、何のために、ここ、へ…？」

ある事に気付いたルーシヤンは、目を丸くする。

「え？ …ささ、め？」

小瑪の後姿が、違う。髪が…艶やかな黒のままだけど…首筋までの長さしかない。見える限り、肌の色も健康的な小麦色に変わっている。体格からは、弱弱しさがなくなっていた。

「…どうして…？」

小瑪の内からエミールが流れ出ただけのことなのだが…  
ルーシヤンの疑問は誰にも聞こえない。

「…っ」

ひとつ止まっていた涙が再び溢れ出した。

（私は、ここにいるのに…）

誰も、ルーシヤンを振り返ってくれない。

人間に捕らえられていた頃は、嫌というほど視線を向けられたの  
に。

（もう、想いも伝えられない…）

胸元を握り、蹲すくまった。息だけが、嗚咽となって零れる。

（イヤ…イヤよ…どうして邪魔するの！）

グと、下唇を噛んだ。

人間の世界からも、人魚の世界からも、見捨てられた気さえした。

破（後書き）

評価ありがとうございます！ 嬉しいです。

…難しく、ごめんなさい。ちょっと、自分でも收拾がつかないことになってきている気が…ちゃんと吟味せねば…

もう、なんだか、自分が思ってた終わり方に近付いてるのかさえ、危うく　おいっ！

うわ、やばい…（汗）

さ、最後まで頑張ります！ 次回投稿は遅くなるかもしれませんが、とにかく頑張ります！ なるべく早くに出せるようにします！（泣）  
迷惑をおかけてすみません；

## 苦

小瑪は、ルーシヤンが独り泣き崩れているのも知らず、二度と逃がすまいとてエミールを抱く<sup>いだ</sup>。

あの時は、腕の中に閉じ込めていても消えてしまったから。

「…私は、待っていた…何のために…？」

エミールが、また繰り返した。探すように、声が彷徨う。

「すべてを取り戻すために、だろう？」

おかしくて、小瑪は咽喉の奥で微笑った。

自分で言っていたことなのに、何度も疑問するエミールが可愛い。

「私は、どうして、生きて…？」

あの時、確かに、消えたはずなのに…」

小瑪に命を託し、世界から消失した。

「…お前は、確かに消えた。だが、“玉”は教えてくれた。まだだ、と…」

小瑪は言う。“玉”が熱を帯びる度、エミールの存在を叫んでいた…と。

「…まだ、終わっていない」

小瑪が死ぬことを諦め、それなりに生活を始めた時、“玉”は静かに存在するだけとなっていた。

「けれど、ある日“玉”は、この身を裂きかねない程の力で、俺の意識を奪った…」

それはあまりに突然で、抵抗も何もできずに、“玉”の力に引張られていた。

小瑪はエミールの肩に顎を預け、語る。

「…暗い、心が凍てついてしまいそうな、昏い場所で…俺は流され続けた…」

意識が沈んだ中、誰かが囁いた。

…マダダ…

一言、明確に、小瑪の心に刻み込んだ。  
暗闇が回転する。小瑪はずつつと堕ちていった。

何故だ！？

何故、そなたがここにおる！？

そなたが愛した…瑞樹の末裔でさえ、幸せを与えられなかったのか…！

嘆く声は、もはや王とは無縁の、ただ一人の親としてのものだった。  
憔悴し切っていて、どうしようもなく苦しい…

…それとも、我を責めに来たのか？

終わらせぬと、言うのか…？

簡単には、忘れさせぬと…？

己を責め、病んでいく…

つられて、小瑪は重たい瞼を懸命に押し上げた。

薄く開けた視界を通過していったのは、輝かんばかりに純白の人魚の像。

…エミール…

真つ暗闇の中、ポツリと深海の王が頂垂れて……

唐突に、目を覚ました小瑪。埃っぽい床にぼんやりと伏したまま、夜に染まっていく室内を見るともなく見ていた。

蕭然と、紅をはいたような薄い唇を動かす。

「……エミールが、戻ってきた……」

……結局、独りでは逝けなかったのだろうか。

しかし、戻ってきたなら会いに来るはず。すべては、それから訊けばいいだろう。

「……やっと、会えた。」

“玉”が知らせる度に、胸がしめつけられた……

小瑪は、エミールの背を、白金の髪越しに撫でた。

「……エミール。何故、戻ってきたんだ？」

俺はっ……」

撫でるのを止め、さらに強くエミールを掻き抱く。

「俺が、どんな想いで……お前を追うのを諦めたと思っている!？」

永い年月、蟠っていた想いを吐露した。

「……ご、めんな……さい……」

申し訳なさそうに、エミールが嗚咽を呑み込む。

小瑪は眉尻を下げ、首を左右に動かした。

「……すまない。お前を責めるつもりは、なかった……」

一呼吸置き、

「何故、戻ってきたんだ……?」

想いと共に抱えていた疑問を零す。

「な、ぜ……」

エミールは、記憶を手繰るように、反芻した。

「……なぜ……」

私は、すべてを取り戻すために、戻ってきました……

何も……何も、ありませんでしたから……」

突如、月長石の瞳を丸く円く開き、虚空を見据えた。

「私の意識は、途絶えた　あの瞬間、確実に　なのに……そのは

ずなのに、私の意識は、また浮き上がった……」

「ハア、ハア……と、短かな呼吸をするエミール。」

「そして、気がついた……声がないことに……」

「持って逝かなければならなかったのに……」

あの声は　私の声は、命を殺してしまう　他の誰でもない、

私に宿った“声”……私が、最後まで持っていなければならなかった！

もう何も失いたくなくて……これが、私が生まれた理由なんだと思

い、死を望んだはずなのに……」

無意味に終わった。

苦（後書き）

いつも読んで下さる皆様には感謝するばかりです。

謎が謎を呼んで、自分の文章力では追いつかなくなってきたり

…（汗）

過去と現在を行ったり来たりして、大変読みにくいのではないかと思います。長いこと連載させて頂いて、勉強が足りないことに痛感しました。

なんとか、ひとつひとつ解決させていきます。

後書きに、長々と付き合わせてすみません（汗）

もし良ければ、続きも楽しみに待っていてください（笑）

狂

ア……私ハ……？

ココハ……ドコ……？

何モ……見エナイ……

寸分先も、自身の身体さえも確認できない、奈落の世界。  
エミールの意識が浮上した。

……私ハ……死ンダハズ……  
ドウシテ……考エルコトガデキルノダロウ……

……時の流れも感じられない空間で、想う。

……小瑪ハ、マダ泣イテイルノダロウカ……

……心配……

……耳が痛いくらい静寂に包まれたそこは、エミールが嫌った海の底

に似ていた。

孤独が<sup>お</sup>押し寄せ、心を蝕んでいく。

.....

ドウシテ...チャント殺シテクレナカッタノ...

私ハ身ヲ挺シテ...世界カラ退イタノニ...

.....

身を縮めるように動くと、身体が存在が感じられた。

.....

身体モ...残ツテイルノ...?

私ハ...死ネナカッタノ...?

.....

キラリ、と、この世界にあるはずのない煌きが意識に留まる。

.....

何...カシラ...

.....

アア...アレハ...小瑪ガ持ツテイタ短剣...

.....懐カシイ薰リガスル...

.....

地底を<sup>うじ</sup>蠢き、短剣を手にした。黒い影に、短剣が持ち上げられる。

白銀の刃は、世界をありのまま映し出していた。

エミールは口を開き、咽喉の奥から声を絞る。映った現実には、悲鳴を上げた。

人魚姫

ア...アアア...

!!!!!!

ザザザザ、と、闇が退いていく。

天の光が届かない、深い、窈い海の底。

醜いエミール。まるで、妄執に取り憑かれた狂人のよう。

爛れた皮膚を引き攣らせ、白濁の双眸をまんまるに開いた。

「……“声”……が……」

船と船がぶつかり擦れるような、樹々が腐敗に倒れるような、不快な程に掠れた音が口から洩れる。

「“声”がない……どうして？」

口を苦しげに歪め、ギチギチと胸を掻き毟った。だが、血が溢れることはない。

「あゝ……どう、して……」

死ねなかつた上に、声も、姿までも失った。

ギ……と、掻き毟る手を止める。

「……“声”……」

“声”を持って逝かなかつたから、戻された？

その罰として……だから、死も叶わず、こんなにも醜悪な姿で……？

「……どうして、私が……」

この“声”は誰が授けた？

何故、他の誰でもなく自分に？

どういう権利があつて、自分だけを罰する？

「私が、罰せられる謂れはない……！」

確かに、罪もない命を殺しただろう……だが、そうさせたモノが悪い……！

人間は、望んでもいないのに近寄ってくる！

「私は、悪くない……こんなチカラを望んだモノが悪い！

私は被害者だ！」

憎悪が迸った。

「ただこの世に生まれ落ちただけで、どうしてそのような枷を嵌められなければならなかつた!？」

この宿命たぐひを与えた世界が憎い！

「私だけにすべてを負わせて、安穩と暮らす者たちが憎い！！」

私は何だ！？」

何故、生まれた？

どこにも居場所がないのに…

まだ……すべてを取り戻すまでは、終わらせない！！

「…小瑪…」

何度も愛を交わした。

なのに何故、殺すことを選択した！？

「愛していると言いながら、例え私が望んでいた事だったとしても

…！！」

何故、完全に殺してくれなかった？

すべてが終わるはずだったのに、小瑪が狂わせた！！

「全部、貴男が持っているの…？」

小瑪が、すべてを奪った。

「返して ……！！」

エミールの咆哮に海流が呼応し、激しく逆巻き出す。海水を切り

裂くように、エミールを地上へ連れていった。

エミールは短剣をかたく握り締め、世界を睥睨へいげいする。

闇を纏い、二本の足で海原に立った。

陸上が目視できない海のご真ん中、新月を背に歩き出す。

どす黒い感情に、心を煮え滾たぎらせて…

狂（後書き）

あらすじと内容が随分逸れているような…？

あー、長々と人魚姫に付き合っ下さっでありがとうございます！  
もうすぐ最終話を迎えるはずですよ…って、私のもうすぐと皆様のもうすぐは、感覚が違うかもしれません。実際、そんな事を言われたことがありますからね…ハッ！！ す、すいません、後書きに変な事を書いてしまっ！！（汗）

あ、では、次回もお楽しみにー！（焦）

触（前書き）

更新が大変遅くなりました。すみません。

人魚姫

## 触

不安定な意識は簡単に揺らぐ。エミールはじわりと、けれど一瞬にして闇に吞まれてしまったのだった。

「まるで…幽霊みたいだ……」

死してもなおこの世に留まる魂……それはふとしたことで闇に縛られ、悪霊と化す。生前、どんなに善良な人であったとしても、だ。いま目の前に存在するエミールは、幽霊なのか……だが、触れることができる。

幽霊とは、触れることができるのか？

「…違うのか…？」

小瑠は独りごちた。

もしかすると、“声”と“玉”を取り戻したことで実体化したのかもしれない。

「んー…？」

ただ、幽霊みたいなのであって、幽霊ではないのだろう。実体があってもおかしくないということか。

そこまでで壁に衝突し、小瑠は腑に落ちないとばかりに小さく唸った。

つらつらと思考する小瑠の傍ら、エミールは半ば臉を伏せ、睫毛を濡らしている。

「……私は海を歩き、ようやく人魚浜に戻ってきました……」

過去を、ポツポツと続けた。

「けれど……小瑠のところに戻ってくれば、“声”も“玉”も取り戻せると思っていました。でも、小瑠は“声”を持っていませんでした」

与えた“玉”の力により、小瑠は姿が変わっている。その姿で、小瑠は静かに暮らしていた。嘆く姿は見られず、淡泊な日々を送っ

ている。

「……私は、先に“声”を見つけようと思いました」  
「エミールは嗚咽を詰まらせた。」

「その時は、憎かつたんです…小瑠が。私なしで生きている小瑠が  
涙を見せない小瑠がっ！」

沸き立つ感情は憎悪に満ち、曇った瞳には小瑠の表面だけしか映  
さない。

ここに“声”がないなら、見つけてやろう…殺シテヤロウ。

……

……私ノ声デ……

……貴男ダケノタメニ歌ツテアゲル……

……

闇に背を押され、再び歩き出した。

「けれど、“声”は見つからず……世界中探しても判らず……永い  
年月を費やしてしまいました」

そうして、“声”を宿した者を見出す。

エミールは、両手に顔を埋めて噎ぶルーシヤンに視線を向けた。

「地上にない“声”を深海に求めた時、ルーシヤン、私は貴女の産  
声を聞きました」

自分の名に反応し、涙でくしゃくしゃになった顔を上げるルーシ  
ヤン。

「正しく、私の“声”でした」

茫洋と、口を半開きにしていた。

「すぐにでも返してもらおうかと思いましたが…」

眉宇を寄せ苦笑いを零す恋敵を、翡翠の瞳に映す。

「できませんでした……どれだけの苦しみがあるのか、思い知れば  
いいと思ったのです」

『……私が“声”を持ったのは、偶然……？』



触（後書き）

内容は大丈夫だろうか？ 続けて読めましたか？  
一ヶ月も放置してしまうことになるのは、思ってもみませんでした…  
こんな中でも、読んでくださると嬉しいです。  
最後まで、頑張りますw

気

小瑪は黙したまま、エミールの背に回す腕に力を籠めた。憎悪に塗れたエミールの表情が、瞬時に弛む。

「……偶然“声”を宿した貴女を、私は救うことができました。こうして、貴女が地上に出てくる前に、何度も機会はあったのです。でも……判るでしょう？」

エミールは、ルーシヤンの視線を捕らえて放さず、痛ましく微笑した。

「どんなに愚かな願いをしたのか、身を以って知ればいい……苦しみ……どんな過ちを犯してしまったのか、後悔し続ければいい……」

……  
……許サナイ……

……私ダケニ、スベテヲ押シツケテ  
幸セニナルナドツ

！……！

……

「私は、憎しみから逃れられなかった。憎しみ以外の感情を、思い出せなかった」

ルーシヤンはコクリと唾を飲む。咽喉が渴き、苦しかった。だが、

……。

「……ずっと、貴女を、国を観察していました。不幸になるよう願いなから……」

しかし、ルーシヤンは皆に愛され、エミールを嘲うかのように、健やかに育っていく。国にも、禍が降ることはなかった。歌声は同属を惑わさず、地上へ行くのも許されていない。苦しみを味わわせてやれなかった。

ルーシャンが皆の目を盗み、地上に出るまで、エミールは腸が煮えくり返る思いをする。ルーシャンが地上へ向かうよう、手を出すべきか考えた。

「でも、私が細工をする必要もなく、貴女は地上に出ました」

その後は、思う通りに事が運んだ。

「そうして、貴女は自ら人間を呼び寄せ……」

「私は、人間を呼び寄せてなんか……」

「いいえ。歌声は、自身が拒んでいたとしても、人間を呼び寄せます」

「……」

「また、貴女には人間を見てみたいという好奇心もあったはずですが、ルーシャンは言い返せなかった。その通りなのだ。地上、空に興味があったのと同様に、人間にも会ってみたい気持ちがあった。

「……人間に捕らえられた貴女を、いつまでも見ていたかった。人間に悩まされる貴女を見ては、愉悦に浸っていました」

だが、あまりに永い時間を起きていたせいなのか……いつしか疲労を覚えるようになった。

闇に縛られ不幸を見ることに喜びを感じても、疲労は少しずつ蓄積していく。

「……もういいだろうと思ひ、貴女の前へ……」

ルーシャンを助け……タダではないが……早く終わらせようと。終わらせて、眠りに就こう。

……

……虚シイ……

……

エミールの中で、闇が弱くなり始めていた。

「……すぐに小瑯の元へ行かなかったのは、空を忘れないため……どんなに嘆いても、自然は美しいから……」

…やっと、すべてが終わる。

闇に呑まれた身なれど……今度こそ、すべてを背負って逝ける。  
柔らかな表情に、ルーシヤンは悔しげに唇を歪めた。

だが、もっと苦しいのはエミールなのだ。

『……どうして、そんなにキレイなの……？』

エミールが困惑気味に首を傾ぐ。

『私は、貴方が嫌いだったのに……！』

「今でも、私が憎いでしよう？」

『……判らない……判らない……！』

フルフルと頭を左右に揺らし、亜麻色の髪を波打たせた。

『嫌い、だった……』

小瑪の心を捉え続けるエミールが。

完璧な美を持ち、恋人までも手に入れている。

(私には、どちらもない……)

初めて恋した相手には、すでに恋人が居た。

(小瑪……)

しかし、小瑪の相手がもう存在しないなら望みはあったのだ。なのに、現れて……小瑪も、それが判っていたかのように待ち続けて……

(私が、出る幕はなかった……)

ついに二人は永い時を経て再会した。

『……貴方が、本当に悪い人なら……心の底から憎めたのに……！』

ルーシヤンはエミールを、エミールはルーシヤンを……視線を合  
わせたまま、気持ちを奔流させる。

『……貴方なんか嫌い……でも、キレイ……！』

拙い言葉に、エミールは怪訝そうにした。

「……私は、キレイではありません。私はすべてを憎み、貴方を不幸  
にしました。小瑪も、殺そうと……」

『私は、不幸ではなかった！確かに、見世物にされたのは辛いこ  
とだった……でも、小瑪に逢えた……！』

人魚姫

ルーシヤンはハツとしたように、目を睜る。

気（後書き）

最後まで読んで下さった方！  
ありがとうございます！！  
次回もお付き合い下さいねw

人魚姫

## 差

『貴方のおかげで…小瑪と、数日だけ生活を共にできた……幸せ、だった』

ハラハラと、ルーシヤンは涙を流れるに任せた。翡翠の瞳は、まるで小さな海のように。

『…想いが伝えられないのは、苦しかった……でも、側に居ることができた……』

幸せだったのよ……』

何度も頭を撫でられた、その感触が心地良い。

垣間見せる優しさが、いとおいしい。

『声が失<sup>な</sup>くて、大好きな唄も歌えなくて…覚悟をしたはずなのに、後悔して…辛かった……正体がばれると泡になってしまっ…海に帰ると、もう人間の姿ではいられないのだと思ったから、海みんなに謝って…謝って……辛かった　でも！　でも、私の辛さは貴方と比べられるものではないんだわ！』

私の辛さは、貴方よりも小さい……』

エミールもまた、偶然選ばれたのだ。

そして、あらゆる苦痛を背負わされ、生も死も許されぬ。

『私は、貴方のお蔭で、誰も殺さずに済んだ……“声”にそんなチカラがあったなんて、知らなかったけれど……』

もしも、“声”の持ち主が自分だったなら、どうしただろう？

ルーシヤンは瞼を下ろし、ゆっくり呼吸して考えてみた。

もし、エミールではなく、自分だったなら……

…エミールのように、悲しみに暮れるばかりはしなかったらう。

心が、いつか崩れて…

（私なら、すべてを破壊したかもしれない。人魚を殺す人間を憎み、理不尽な運命を与えたモノを恨み、何も知らずに生きるモノ達を呪

い……)

この世界を、滅ぼしたかもしれない。

「私が貴方だったなら、怒り狂って、目に留まるすべてを壊しまくったと思う」

下ろしていた瞼を上げ、戸惑ったような表情をしたエミールを見据えた。

「貴方だから、世界は助かったのよ。たくさん死んだのだろうけど、世界は消えていない」

「……キレイ事はやめて下さい。そんなもの、まやかしにすぎません……都合のいい解釈です……」

ついと、エミールは視線を伏せる。淡く滲む太陽光に照る、浜の砂を見つめた。

ルーシヤンの言葉を、読んでいられなかったのだ。

「私は、穢れています。貴女達と同じ生き物ではないのです。

……罰せられるべき罪を犯しました……」

歌声に惹かれ、人魚に興味を持つ人間を殺め……実の親までも、死に追いやってしまった。

そんなつもりは、なかったのに　いや、あつたかもしれない。

誰も、同属は一人も、傍にはいてくれなかったのだから。

皮肉にも、人間であるデゼロや小瑪だけが、共に在ることを望んでくれた。

「ちゃんと生きていた頃は、この運命を受け止め……私だけの人生で、誰も死なずに済むなら、それでいいと……」

しかし、小瑪への愛が死の恐怖を煽ることがあった。小瑪と一緒にいたいと思う気持ちも……本当は、生きていたくて……それらが、死を遅らせる。

「もっと早く……小瑪から離れられなくなる前に、命を絶つべきでした　いいえ！　もっと以前に、人間と出逢ってしまう前に、地上に興味を持つ前に、死ぬべきでした……」

今更、後悔しても遅すぎだ。機会はいくらでもあったのに。愛す

ることを知る前に死んでおけば、辛酸を嘗めずに終われたのだ。

「……私は、やはり、禍だけでしかない」

『やっぱり、キレイだね……』

いつの間にかルーシヤンが近くに来て、エミールの視界に入るように覗き込んでいる。

「……キレイでは、ないと……」

『どうして、自分を犠牲にするの？ 貴方だって、みんなと同じように、普通に生きてみたかったでしょう？』

私は、死にたくないわ……今はちょっと、本当に、死んじゃおうかと思っただけ……』

きまり悪そうに肩を竦めたルーシヤン。

『とにかく、怒って、暴れて……私を、否定するモノを許さない』

生きているモノなら、誰だってそうであるはず。

何も憎まずにいられるのは、聖人だけであるう。

『私だって、存在しているのよ』

四つん這いになっているルーシヤンは、涙を拭い、晴れた瞳を上げた。

## 父

『貴方は、全部わかつているのでしょう？』

エミールは息苦しそうに、小瑪に縊すがる。

「判りません…何も、判りません！」

月長石カインストーンの双眸が苦渋に乱れた。

「小瑪がどうしてあの短剣を持っていたのか…：父上、ツ  
と、言葉が詰まる。

弾けた短剣。

懐かしい薫り。

…：そうだ、あの薫りは父上のものだ。

「父上が、どうして小瑪に短剣を渡したのかも…」

何故、他人に子の命を託したのだろう。

「どうして、私だったのかも…」

人魚はたくさんいるのに、他の誰でもなく、エミールだったのか。

…：父上は、自分の手に余して、私を見捨てた…！」

見捨てられていなかったなら、このような状況にならなかったの  
ではないか？

悪いのは、誰だ…？

「エミール」

それまで、ずっと黙っていた小瑪が口を開いた。

ルーシヤンはハツとして、エミールから視線を外す。だが、その  
視線は小瑪に向けられていなかった。エミールは怪訝そうに眉を寄  
せる。

「王は、君を愛していたよ。王だけでなく、人魚たちは皆…」

「嘘です…！」

信じられる訳がない。

愛していたと言うなら、どうして誰も手を伸べてくれなかった？

「父上も、皆も、私を深海から遠ざけました！ 蔑むような目で、私を見て」

「それは、誤解だ」  
低く囁れた声。

明らかに、小瑠の声ではない。

背後からの声に、エミールは驚き、小瑠の抱擁を解いて身を抜いた。

「？」

数歩離れた所に、壮年の男が立っている。いつからいたのか、気配をまったく感じなかった。

「だ、れ…？」

男は草臥れた雨具を着ている。

「あ、館の…」

ルーシヤンは彼を見たことがあった。囚われの身であった頃、丘の上の館で。彼は、あの館の使用人だ。

だが、何故ここに？

「すまなかった、エミール」

「！！！！！！」

それだけの言葉なのに、エミールは彼が誰か判った。

「え、あ、もしかして…？」

ルーシヤンもまた気付く。

「ち、父上……」

エミールは驚愕し、掠んだ音を洩らして、呆然とした。

そう、男の正体は十一代目国王、エミールの父である。

「生き、て…??？」

死んだと思っていた。実際、十一代目国王の死は人魚達を動揺させたのだから。

エミールも、心の片隅で苛まれていた。

「人魚で在ることを捨てたのだ。命を絶つのは、国王としても、親としても、無責任だろう…だが、王のままでは自由な行動がとれ

ない」

苦笑するかつての王は、エミールや小瑠が知る容貌ではない。じっくり観ても、本人だとは信じ難かった。何の変哲もない、ただの人間にしか見えないのだ。

「…本当に、父上…なのですか…？」

混乱するエミールは、微かに震えていた。

「そつだ…」

苦笑混じりに破顔する男を目にし、

「ああ…」

吐息を零す。

(父上、だ…)

遠い昔に見た、その笑顔。  
間違いない。

父（後書き）

読んで下さって、ありがとうございます！

「壮年の男」の登場は、友人の何気ない一言からでした（笑）

そんなに大きな役目なかったんですけどねー；；；

自分でも驚きですよ…「壮年の男」なんて、覚えてました？ 私は

忘れてました…（照；）

では、次回もお楽しみに！

光（前書き）

約二か月ぶりの更新；  
大変お待たせしてしまいました。

人魚姫

## 光

セシルは何が起こっているのか、固唾を呑んで見守るしかなかった。

父王の向こうでは、純白のエミール像が光を脈打たせている。

「……一体、」

何が起ころうとしているのか。

「ッ?!?!?!」

瞬間、エミール像が一際強い光を発した。

あまりの眩しさに、セシルは目を庇い、身構える。閉ざした瞼越しに、なお光が射した。

光だけが、空間を支配する。

「……………」

やがて、光が失せていき、恐る恐る瞼を上げてみた。

父王が翳していた腕を下ろし、杖をカツンと鳴らす姿が見える。

「……………」

セシルは眉を顰めた。

強烈な光によってぼやけた視界が、次第に回復する。

「えっ!?!」

そして、

「お、父様……像、は……??」

今までそこに在ったはずのエミール像が跡形もなく消え失せていた。

セシルは皿のように目を丸くし、状況の把握に惑う。

「恐らく、終わるのだ……我々は、何も出来ぬまま……」

物憂げな面差しで、父王がひとつしかない窓を仰いだ。

「……………」

セシルも釣られて上向く。  
チラリ、と、光の名残が掠<sup>かす</sup>めた。

人魚属の王であった男は、左手を前へ出した。掌を空へ向け、エミールを見つめる。

「私は、お前の誕生を心から喜んだ。それは、他の者達も同じだった。だが、私達の愚かな願いからお前を苦しめることに……私達はひどく後悔した。たったひとりに背負わせてしまったことを悲しんだ」

双眸を細め、顎を引いた。掌には、海から現れる光が集まる。

(……何の、光かしら……)

ルーシヤンは首を傾ぎ、不思議に光の正体を思った。

「お前を救いたかった」

エミールの身体も白光を放ち始める。

「己の身体の変化に恐怖し、エミールは小瑠の右腕に伸ばし縋っていた左手を、ぎゅっと握った。小刻みに震えるその手の上に、小瑠の手が重ねられる。」

「吾子 お前は、私の大切な子……愛している」

濁りなく響いた言の葉。

裏切りなど見当たらず、真実ばかりしかない。

瞳目したエミールの瞳から、雫が転がる。

「……本当に……？」

父が肯くのを目にし、小さく微笑した。ゆっくりと瞼を下ろす。

小まかな震えも止んだ。

「嬉しい……」

ずっと求めていた言葉……それは容易に手に入れることが出来た。きつと、怖れていたのだ。己の声によって、愛する人が傷つくことを……

キン　と、エミールは光に包まれ、男の掌の光も球体になる。

『あっ』

ルーシヤンは眼前の事態に驚き、口許を両手で押さえた。

男の掌にある光は何なのか……何故、エミールは光の球になってしまったのか……何一つとして掴めない。

一方、小瑪は取り乱さず、目の前の、光の球体となったエミールを抱き締めた。

「瑞樹の者よ」

空気を震撼させる男の声調こえには、王であった頃の威厳が漂っている。

「すべてが揃っていないければ、受け入れられぬか？」

「……………」

ルーシヤンは気圧され、男の科白コトバも理解できなかつた。が、小瑪は違う。

たった今の科白を吟味するように黙し、視線を伏せていた。ほんの後、緩慢に正面の男を見据える。

「俺は読唇術が得意ですから、問題ありません」

淀みない、けれど少し間の抜けたような答え。

彼はどこまで、何を知っているのだろう。

確信を含んだ低い音色。

「そうか……………」

これから何をしようとしているのか、判るのか……………？

フ、と、男は唇を弛め、温かい雰囲気を醸す。

場の空気が和んだことで、ルーシヤンの緊張も解けた。

小瑪の背後にいるルーシヤンは、光の球体に身体を預ける小瑪の後ろ姿を見つめる。

(……………今、小瑪はどんな顔をしているのだろうか)

まだ、本来の姿に戻った小瑪を、真っ直ぐ目にしていない。

その顔で、きっと、穏やかな安息の表情をしているに違いない。

愛する人……エミールが、そこに居るから。

『……………あつー!!』

淋しげな瞳を微かに湛えていたルーシャンだが、現在の状況を思い出した。

そうだ、肝心のエミールは光の球になったまま。

(……………ちよ、ちよっと待って……………エミールは、どうなってしまったの?)

元、戻れるのか?

(二人は、どうして普通に話しているの?!)

会話の内容はまったく理解できなかった。

あの男の掌の球は何だろう。

ルーシャンはオロオロし、独りにされ、エミールの事に慌てない

二人に対して怒りを覚える。

(愛して、いるのではないの? 心配していないの?!)

下唇を噛んだ次には、無意識的に立ち上がった。

「ちよっと、貴男達!!」

胸の前で拳を薙ぎ、憤然とする。

光（後書き）

本当に申し訳ありません（<―>）  
もう少し早く投稿できるよう、頑張ります！

## 発

男は目を丸くし、怒りを露わにする乙女を見た。小瑪も緩く振り返る。

「なに暢気のどろに話まをしているの!? エミールは!? 話まをしている場合ではないでしょう!! エミールを助けてよっ!!」

眉を吊り上げたルーシヤンは、光の球体を示し、男を睨んだ。

「その手の光は何!? 何か力があるなら、エミールを助けてよ!

! あっ!」

と、男の掌に光が集まるのとエミールが発光し始めたのがほぼ同時であったことを思い出す。

「その変な力で、エミールをどうかしたの!？」

仮にも相手は十一代目国王であった者だというのに、ルーシヤンの勇ましいこと。

相手に反論の隙を与えぬ速さで舌を回す。

「愛していると言ったでしょう! どうして、エミールにこんな事をするの!? みんな、嘘だったの?!」

朱くなったり蒼くなったりと、コロコロ変わるルーシヤンの忙しさに、男は吹き出し、くつくつと肩を揺らした。

「??? なに……どうして笑うのよ? 笑ってないで、早くどうかして……助けて!!」

無礼千万だとばかりに鼻を鳴らすルーシヤン。

もし、戻れなくなったら……焦燥感が募る。

「ルーシヤン……」

「なにっ!？」

細波さいなみのような小瑪の声に呼ばれ、訊き返すが、相当余裕がないよ  
うで、

「なに!!!?」

もう一度性急に繰り返し、一瞬だけ瞳を移した。

「な　えっ????」

男を逃したくなくて目を光らせていたが、その一瞬に驚くべき光景を見る。映像を脳に運び、脳がその映像を分析するまでに多少時間が必要になつたくらいだ。

「え、ええ??　どうし、て……え?　何?　どうして、エミール……????」

ルーシヤンは口をパクパクさせ、小瑪の腕の中にくったりするエミールを凝視した。

いつの間にやら、光の球体ではなくなっているエミール。変わらない白金の長い髪、白蓮の肌、苺のように甘酸っぱそうな唇……文句のつけようがない美貌である。

しかし、腰からは銀の尾鰭しろがねおひねではなく、人間の足が続いていた。

「なに?　どうなつたの?」

確か、エミールはすべてを取り戻したはず。

なのに、何故また人間の姿になっているのだろう……

ただただ混乱し、狼狽するルーシヤン。

小瑪は片方の手を口許に当て、何か堪える仕種をした。

「なに?　……小瑪?　貴男まで、何を笑っているの??」

くすくす、と、小瑪の唇から笑声が洩れている。

ルーシヤンは疑問符を眉に浮かべ、ムツとしながら、小瑪の横顔を見た。

健康的な小麦色の肌、凜凜しい唇、鋭い双眸……もうどれひとつとて、エミールには似ていない。

「……小瑪、男前ね」

見惚れて、正直な気持ちを零す。

現状を考えると、そんな事を言っている場合ではないのだが。

「前よりも、格別にいいわ」

思った事を口にせずには居れないルーシヤンであった。それが、小瑪の事であるから尚更。

まだ可笑しく笑い続ける小瑪は、ルーシヤンの方へ顔を向け、目許を和ませた。

「本当に、その瞳と髪の色は変わらないのね」

劇的というか必然というか……そんな、エミールとの再会時、憎しみ狂ったエミールが言った事。

その通りだ。

艶やかな黒髪と瑠璃の瞳。

ルーシヤンは感慨深げに呟き、ほうと吐息した。

「ルーシヤン、声……」

「え？」

微笑む小瑪が促す。彼女は片眉を上げ、キョトンとした。

「声……？」

又と喉元に触れ、判らず反芻する。

「……！！」

すると、ようやく気がついたのか、みるみる双眸が見開かれた……開けるだけ、限界まで。

息を肺一杯呑み、浅く早く呼吸をする。呼吸も儘ならない程、驚愕する事だった。

「あ……私の、声……？」

咽喉に触れる指先が、フルフルと震える。

さくらんぼのように可愛らしい唇から、それに見合った声が溢れていた。

エミールの“声”ではない、ルーシヤン自身の声。

春日の如く、麗しい音。

「私の……？ 本当に……？」

だが、完全には信じられず、未だ咽喉を撫でるルーシヤン。

つつんと袖を引かれ、小瑪は視線を落とした。そして、微笑み、頷く。

「ルーシヤン」

奇妙に眉を寄せたまま振り返り、小瑪を見、薄い月長石の輝きに

表情を一変させた。

「エミール！！ 大丈夫？」

喜色と気遣いに、翡翠の波を揺らす。

小瑠の腕の中で意識を浮上させたエミールは、傍に膝をつく心優しい乙女に笑みを見せた。自然と空気を柔らかくする笑い方である。

「ルーシヤン」

口を開いたのは、小瑠。

「君の声は、初めから君の中に在ったんだ」

「え……」

「皆が自分だけの声を持っている。君もそう……ただ、エミールの“声”のチカラに邪魔されていただけ……」

ルーシヤンは僅かに瞠目し、また喉元に手を持っていく。

「……在った？ 最初から、私の中に……？」

じわり、と、睫毛を濡らし、雫を溢れさせた。

「そう……私は、見つけてあげられなかったのね。ずっと、自分の声だと思い込んで、探すこともしなかった……」

自嘲的になるルーシヤンの泪に濡れる頬に、エミールは手を伸ばし、撫でる。

ルーシヤンはエミールを見、エミールが何か言つのを待った。エミールは何かを言いたそうに、微かに唇の端を下げる。

「仕方がないよ」

エミールが何かを言う前に、小瑠が続けた。その一連に、ルーシヤンは驚き、怪訝そうにする。

「エミールの“声”は、君のモノとして存在していたのだから」

エミールはまだ一言も発さず、エミールが喋るのかと思えば小瑠が喋った。

まるで、エミールの言葉を小瑠が代弁しているようだ。

何故、そうなのか……そうする必要があるのか。

ルーシヤンは考えた。破裂してしまいそうな一杯一杯の頭で。

そうして、少し時を溯る。

『すべてが揃っていないければ、受け入れられぬか？』

『俺は読唇術が得意ですから、問題ありません』

男と小瑠の会話。

少ない会話の中に、含まれていた意味は何か……

「……読唇術………声？」

出さないのではなく、出せない。だから、小瑠が代わりに話す。

「エミール、……声が、ないの？」

驚愕で掠れた問いかけに、エミールは肯定を示すように口端を上げた。

「」

男に視線を巡らせると、

「……」

相手は申し訳なさそうに目を細める。

「エミールの声と人魚の姿は、私が持つて逝く」

それは、罪滅ぼし。

父親として、子を幸せにするため……

王として、愚かな願いの後始末をするため……

彼に残された、すべき事。

## 巡

ルーシヤンは眉尻を下げ、男を見つめた。

「持って、逝く……貴男が？」

「そうだ」

男が破顔する。

子の幸福を願い……

「二人共、これからは普通に年をとっていく。失っていた時間を歩んでいける」

「貴男が犠牲になって……？」

「犠牲ではないよ」

キツパリと言い切られ、ルーシヤンは口を噤んだ。

これ以上は、言うてはいけない……そう感じる。

また、何を言ったとしても、彼はもう決めてしまっているのだから意味がない。

(でも……でも……)

ルーシヤンは握った拳を震わせた。

「……でも……」

言うてはいけないと思っても、疑問が巡る。

溢れそうになるのを、必死で抑え込もうとした。

誰が悪いの？

彼がそこまでする必要があるの？

何故、エミールなの？

王家の生まれだというだけで、何故、私なの？

誰かが、“声”を持って逝かなければならないの？

人間は、何もなくていいの？

人間が、すべての元凶ではないの？

何故、人魚は空を見てはいけないの？

地上に出られないの？

海の底に、隠れなければいけないの？

ルーシヤンの口許に、激情が集まる。唇が微かに開き、声が洩れる。

小さく洩れた声は、感情を抑える理性の鎖を緩めてしまった。

「 どうしてっ！？ どうして、人魚が 人魚ばかりが、そんな重責を負わなければならないの！？ どうして人間は何もしないでいいの！？ 人魚は、その存在を物語の中だけに閉じ込められなければいけないの！？」

本来は美しい声が、憎しみと怒りと悲しみに染まる。

「人間が勝手だから、人魚は願わずに居れなかったのではないの！？ 人間がそう願わせたのなら、どうして人間は罪に縛されないの！？」

理不尽だ！

ルーシヤンは嗚咽を洩らし、両手で顔を覆った。ガクガクと肩が揺れている。

答えの出ない疑問に無力を覚え、ただ泣き叫んだ。

「……貴男やエミールや、小瑪が……どうして、辛い事ばかり与えられなければならないの？」

小瑪は、何も悪くないのに。  
愛しただけなのに。

エミールは、この世界に生まれてきたただけなのに。

「……ッ……そうよ　みんな、生まれてきたただけなのに……誰がそんな運命を定めるの？　どうして、悲しみをつくるの？　誰が悪いのっ？！　幸せは、必要なのに！！」

ルーシヤンの嘆きは、誰にも慰められるものではなかった。  
運命、とは……何なのか。

取り留めのない疑問は、種属が違っていても同じである。  
解決の糸口が見つからない。

「誰が悪いかは、判らない。永い歳月を生きていても……」

男は静かに、打ち震えるルーシヤンを鎮めるように、言葉を紡ぐ。  
「でも、確かに生きている」

ヒク、と、ルーシヤンは涙を呑んだ。

「生きているからこそ、流れる時の中で様々な事が起こる。誰を責められる訳ではない」

「……判らないわ……貴男も、エミールも、小瑪も、どうして、そうやって受け入れられるの？　簡単な事ではないのに……」

「生きているからだ……君は、誰が悪いかと訊くが……誰が悪いと思っっている？」

「人間よ！！」

吐き捨てるように叫び、亜麻色の髪を振り乱す。

「人間が、私たちに危害を加えなければ、こんな事にならなかったわ！」

「だが、人間すべてではないだろう？」

「キレイ事を言わないで！」

ルーシヤンはカツとし、男を鋭い眼差しで捕らえた。声を張り過ぎて眩暈を覚える。

「すべてではなくても、同じよ！　人間は何かしたの？　何かするのは、私たちだけじゃない！」

「人間の中には、人魚と再び交流しようと手を伸べた者がいた。しかし、人魚達はその手を振り払った……」

「当然よ！ 人間に関われれば、誰かが命を狙われるわ！」

「だから、悲しみが繰り返される。誰が悪いのかと問い、誰かのせいにして……それでは、いつまでも終わらない」

悪循環。

男は掌の光を胸の前で握り込み、荒波が狂う翡翠の瞳に一点の風を見出した。

「生きている……ただそれだけ。感情に流され、過ちを犯しても、命の存在に喜びを感じることもある。君なら、判るね？」

「……………わかる、わ……………」

乱れた感情を宥め、ルーシヤンはしゃくり上げる。己の感情を制御しきれぬことに恥じ、項垂れた。

「……………ごめんなさい。貴男にぶつけても、仕方がない事なのに……ううん、誰にぶつけても……貴男は、エミールを助けてくれた。ありがとうございます……………」

「いや……………」

縮こまった乙女を前に、男は苦笑する。

「己を素直に表現することは、悪くない。偽りではないのだから……だが、君は少し注意が必要かもしれない」

と、ルーシヤンの今までの行動を振り返るように咽喉を鳴らした。それに、ルーシヤンは頬を染め、少しは控えるようにしようと思う。

笑われたことに、ルーシヤンはばつが悪くなり、むっつりと俯いた。

「そっだ」

はたと、男が思い出したように声を上げる。

「ルーシヤン、だったね？ 君の身体にかかっていた呪は、もうない」

「シユ……？」

すぐにはその言葉の意味が理解できず、頭を傾けるルーシヤン。

「呪……正体が人魚だとされると泡になり消えてしまう、という……」

「……」

「ああ！」

ようよう、合点がいった様子で、大きく頷く。傍で笑声が洩れているのは、この際置いておいて……

「いつの間に……？」

「少年だ。以前、瑞樹の者に雇われた十二、三の」

説明されて、あの日を思い出す。

小瑪の屋敷の玄関でへばっていた、もうひとつの人魚の物語を話してくれた少年。

帰る間際に見せた笑顔がとても印象的な……だが、その瞬間は物語の真偽に囚われていて、あまりはつきりとは覚えていない。

「あの子が、何を……？」

少年とは声を交えたただけだ。呪を解くとか何だの、そんな件くだりはなかった。

「話をするだけで、君の呪が解けるように施していた」

「へえー……」

ルーシヤンは、男の手際の良さに、感心したように間抜けた反応

をする。

「そんなに以前から……」

驚いた呟きに、ルーシヤンは視線を移した。

「……ねえ、小瑪は、私が人魚だって、判ってた？」

なんとなく訊ねる。

訊ねてみたかった……気付いてほしかった……

「ああ。初めから」

答えは一時も待たずに返ってきて、ルーシヤンは僅かに目を見開いた後、鮮やかに微笑んだ。

「……では、私はそろそろ逝くよ」

和やかな雰囲気、男は眩しそうに双眸を眇め、息を吐いた。

三つの視線が注がれる。

男はいまや、霞がかかったように影が薄くなり出していた。

消える……誰もがそう思った刹那、白金の輝きブラチナが男との距離を掠める。

「父上ッ！」

それまで大人しく小瑪の腕に納まっていたエミールが飛び出し、必死で唇を動かした。

男の……父の許へ、駆ける。

「エミール……」

男は瞠目し、体当たりするように飛び込んできた我が子を抱き留めた。

「父上……」

そこから何と言葉を続けられよいか判断がつかない様子で、エミールは別れの淋しさに悲痛な面持ちをしている。

「父上……」

ぎゅっつと、草臥れた雨具を握り締める。

まるで、行かないでと甘え縋る小さな子供のようだ。

「エミール」

男もまた、そんな幼子をあやすかの如く、長い白金ブラチナの髪を梳く。

「今度こそ、幸せになれ。お前の幸福だけを、私は願う」

穏やかな眼差しで、真実いとおしそうに、エミールの白い頬を濡らす雫を拭った。

『父上え……………』

ハラハラはらはら……………涙は溢れ続ける。

「エミール……………泣いてばかりで、しょうのない子だな……………」

男はくつくつと肩を揺らした。

『父、上……………ごめんなさい……………ごめんなさい』

「私は、お前の笑った顔が見たい。ちゃんと……………」

エミールは苦しげに声のない嗚咽を呑みながら、笑顔を見せようと四苦八苦する。

「ありがとう……………私の子で在ってくれて。ずっと、愛している」

男には、もう時間がなかった。身体は、魂は、ズイズイとこの世ではない世界に引つ張られている。

『私も……………大好き……………父上、ありがとう……………』

やっと、やっと笑顔を見せることが叶った。涙で汚れているけれど、最高の……………

男も笑み、最後に強く子を抱く。

男は霧のように消えていき、エミールの腕から感覚が失せていった。

温もりだけが、内に残る。

## 帰

エミールはその場に力無く膝をついた。

空へ昇るように霧散した男を見送り、小瑪は腰を上げ、そつとエミールの側へ寄り添う。

「……エミール……」

ルーシヤンは立ち尽くしたまま天を仰いだ。太陽は完全に姿を現し、海と大地を柔らかく照らしている。

陽光に手を翳し、海へと視線を移した。翡翠の瞳に、同じ輝きを放つ故郷を映す。

「ザザ、と、吹き抜ける海からの風に瞼を落とし、亜麻色の髪を遊ばせた。」

「……」  
「皆はまだ、ルーシヤンの帰りを待っているのだろうか……諦めずに。」

瞼の裏には、たくさんの笑顔が溢れている。

ルーシヤンはついと目を上げ、一步、海へと足を踏み出した。

焦らずに、ゆっくりと。焦る必要は、もつない。呪は解かれた。

海は決して逃げない。

「ならば、本来の姿を彼に……そして……」

汀<sup>みぎわ</sup>まで来た時、歩みを止めた。一度瞬き、波の奏<sup>みぎわ</sup>でを背にする。

「小瑪」

凜とした清らかなる声音で、愛しい人と呼んだ。

これが、どんなに素晴らしいことだろう。

応じた小瑪は背を伸ばし、またエミールも泪を拭い、振り返った。

「お別れね」

ニコリと、豪奢な笑みを顔中で湛える。

「今まで、ありがとう。貴男のお蔭で、私は今ここに立っていられ

る。倒れていた私を拾ってくれて、本当に感謝するわ」

真つ直ぐに瑠璃の双眸を見つめ、それからエミールへと顔を向けた。

「ありがとう、エミール。私を館から出してくれて。貴方にどんな思惑があつたとしても、私は生きている……それで、いいんだわ」  
月長石ムナカシの瞳が、物言いたげに揺れる。

「お父様と、仲直りできてよかったね。私も帰って、みんなに謝らないといけないわ」

ふふふ、と、苦笑いを零し、けれど愉快そうに口許へ指を宛がった。

「ルーシャン」

「小瑪、大好きよ」

ルーシャンは小瑪が何か言うのを遮る。小瑪の声を聞くと泣きそうだったから。

「だから、エミールを大事にしないと、私とその綺麗な顔を張り飛ばすんだから！」

言つて、右手を上げて見せた。

波打つ髪は、背後の波と同調するように揺れ戦そよぐ。

「私は、帰るわ。待つてくれてるだろうみんなの所へ！」

サアア、と、長い髪とワンピースを翻し、躊躇ちゆうちゆういなく海へ身を沈めた。

小瑪もエミールも、煌きの残像を追い、碧い波間を眺める。

「小瑪ー！ あの部屋、少し掃除したほうがいいわよー！」

大分距離がある位置に、ルーシャンが腕を振っていた。陽光に透ける黄金の髪が、海面に広がっている。

ルーシャンの、本来の姿。

「さようなら！ お幸せにね！」

「ルーシャンも！」

小瑪とエミールが手を振り返す。

ハーブが撫なぜる茨さやかな音ねの如く、美しい笑声が響き渡り、尾おひれ鰭びれが

海水を弾いた。その一点に、桜の花びらが散ったよう。

乙女はもう見えない。故郷への、帰路についた。

「エミール」

小瑪とエミールも、帰るべく場所へ。

「帰ろうか」

小瑪は、あの館が必要になることはないと思っていた。戻るつもりなど、初めから。

だが、運命は変化する。小瑪の思案など、鼻で嗤うかのように。

「部屋の掃除を手伝ってくれるとありがたい。二人いても、片付くかどうか……」

再び、人生を歩める。

ずっと待っていた、愛しい人と。

生が与えられるとは、思ってもいなかった。

すべてに感謝しなければならぬ。

小瑪は前髪を掻き上げ、隣でクスクスと唇を震わせるエミールを見た。

……泣いていない。大丈夫。

「エミール」

手を伸べると、エミールはひとつ頷き、手を重ねてくれる。

歩き出す……それぞれが、それぞれの道を。

人魚浜に、点々と足跡が残り、舞う波に溶ける。

けれど、微かに証を残し……

流れ、渦巻く、生きた波。  
この世を支える。

見渡す限りの青い世界に、揺れる虹色の輝き……

## 帰（後書き）

ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございます！！

あらゆる矛盾はどうか目を瞑ってやって下さい（汗）

私の力不足でダラダラと長くなってしまいました。楽しんでいただけただけなら幸いです！……って、この内容で楽しめただろうか……

（考）

とにもかくも、ありがとうございました！！

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0717a/>

---

人魚姫

2008年11月7日06時44分発行